

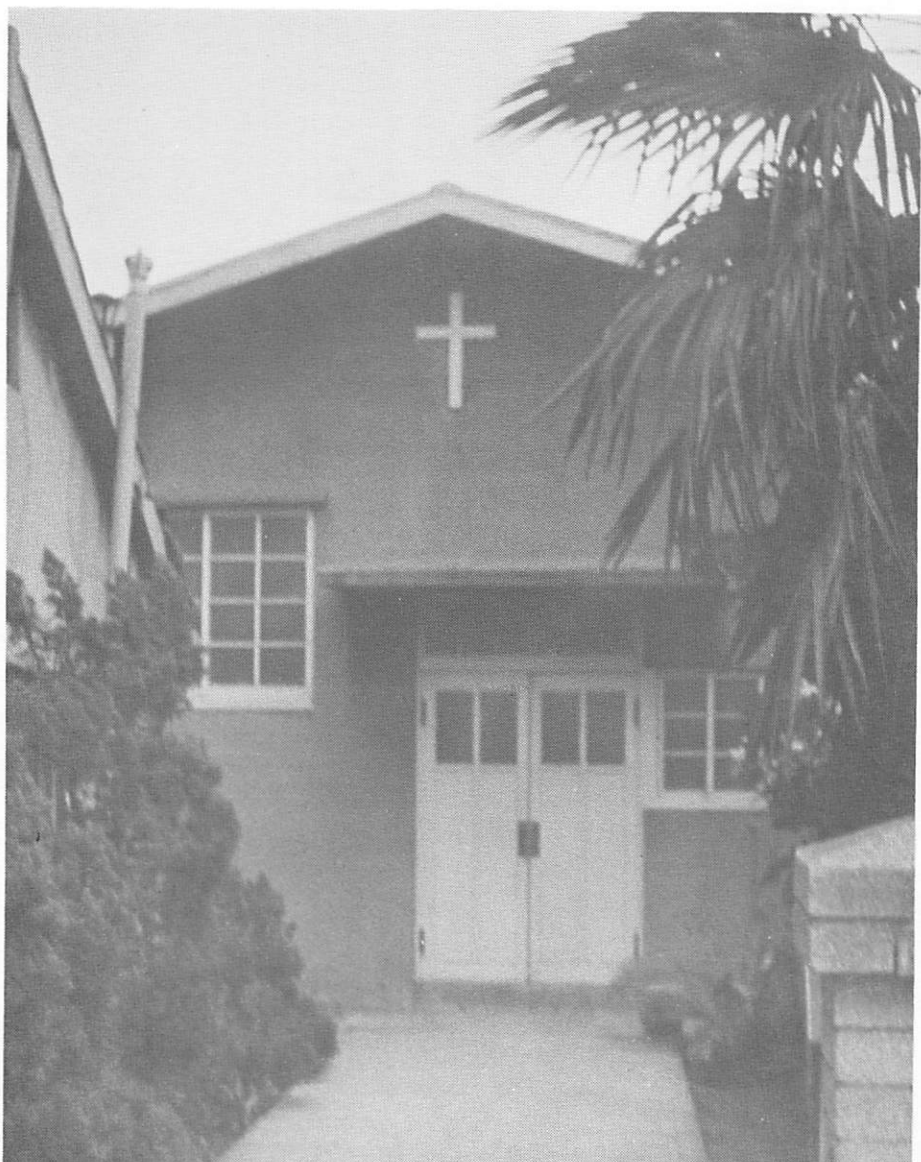
ぶどうの木

第 10 号 (旧会堂特集号)

目 次

巻 頭 言	榎 本 利三郎	1
主の恩寵の思い出	榎 本 利三郎	2
旧会堂の思い出	正 野 真 宏	10
旧 牧 師 館 と 私	高 木 敏 夫	12
旧牧師館の思い出	榎 本 和 義	17
再 会	正 野 員 子	25
旧会堂の思い出	大 口 和 子	28
扉	東 哲 郎	29
集 会 ご と に	伊規須 泰 子	30
歌	正 野 与志尾	32
新旧会堂によせて	岩 井 芙美子	33
神 の 愛	岡 嶋 美代子	34
われらの会堂	小 羊 生	35
牧師館の思い出	榎 本 百合子	38
新会堂落成式、感謝会の記録	編 集 室	41

八 幡 前 田 教 会
大 濠 公 園 教 会



巻 頭 言

榎 本 利 三 郎

主の恵みふかきことを味わい知れ、主に寄り頼む人はさいわいである。(詩34の8)

ぶどうの木10号は旧会堂の思い出特集になりました。今は姿を消しましたが、私共の心に深く刻み込まれたあの部屋に、あのベンチに、あの窓に、あの床に、衷愍こもごもの思い出尽きないものがあります。旧会堂の思い出は主の恵の跡を辿る事と成り、主に寄り頼む者は何とさいわいであるか、尽きない恵みの泉を汲む思いが致します。

今日からは更に新しい会堂の柱に、床に、ベンチに主の恵みの数々を新しく刻みつけて主に寄り頼んで参りましょう。

ぶどうの木も号を追って主の恵みの果実を豊かに結ぶ様成長させて頂き感謝です。



主の恩寵の思い出

榎 本 利三郎

旧会堂の思い出は私にとつて「主の恩寵の思い出」であります。

昭和十二年頃、「月一回の家庭集会では満たされな
い、何とか八幡で礼拝を守り度い」との願いと渴きが
起り、取りあえず河本商店の二階六帖二間を集会所と
して開放して頂き、毎日曜日、福岡から折滝師、野村
兄と私が交替で来て、日曜学校、礼拝、伝道会をし、
その夜九時半頃の汽車で帰つて居りました。

当時福岡まで汽車で二時間はかかりました。博多駅
から十一時半頃の電車で呉服町まで出て、そこで乗り
替えてしたが電車も少い深夜で暇取つて、冬等は寒風
に吹きさらされて手足がしびれる様に冷え切つていま
したが、身体は主の愛でポカポカしていた事も今はな
つかしい思い出の一つとなりました。

是非定住の牧師をとの祈りが積まれ、昭和十四年十
一月三日に八幡へ遣わされて参りました。河本兄が大
正町に牧師住宅用として新築の家を予め用意して迎え

て下さいました。集会は今迄の通り河本商店の二階で
外から直接昇れる階段がつけられました。昭和二十年
八月八日の空襲で焼ける迄礼拝を守らせて頂きました。
又ひどい戦災の中を信者の家族も全員無事に守られ感
謝致しました。

戦災趾に佇み「いつの日か此の所で又聖名を崇める
礼拝を守らせ給え」と祈つて、初代教会の信者が散ら
された様に、東に西にと夫々生活の場を求めて散つて
参りました。私共も家族を郷里へ疎開させ、私は小倉
の西南女学院が旧陸軍の将校宿舎を貸してくれました
ので、そこに住んで、戦災に会わなかつた荒生田、昭
和町方面で家庭集会を開きました。河本兄も戦災跡に
必要に迫られ平屋建の家を建てられましたので、早速
座敷を開放して頂き日曜礼拝を守る事に致しました。

昭和二十二年には家族も小倉へ呼び戻しました。
或る日、河本兄が「小さいマツチ箱の様な、箱だけ
の家ですが主の御用に用いて頂けますでしょうか？」
と謙虚に旧会堂の現場へ案内して下さいました。私は
河本兄が工場を建てたりして居られるのは知つて居ま
したが教会を建て、居られる事は知りませんでした。

戦災住宅しか建てる事を許されない、資材の無い中を色々苦勞をして資材を集め、当時としては素晴らしい会堂と牧師館が建てられて居りました。思いがけない時に木の香も新しい会堂の前に立つて感激と喜びで胸がつまりました。「壁も土壁で作りました」と建物の隅々まで心こめて建てられました。

昭和二十二年九月才一日曜日に献堂式を致しました。河本兄が献堂の辞を読まれました。献堂の辞の一句一句が福音に与かつた喜びに溢れ、此の建物は小さいが、福音が地の果てまで宣べ伝えられるため用いて頂ける喜びを謙遜に述べて居られるのを忘れる事が出来ません。

会堂は三間×四間半の十三坪半、総二階で、玄関が約一坪、電車通りから向つて左隅に五、六段のコンクリート階段の上にあります。玄関のドアは自在蝶番で、一寸押せば内からでも外からでも開く便利なものでした。

左の壁面に下駄箱があり、土間に簀子板が敷いてあつて会堂へ入りました。

会堂には白石大工手造りのベンチ十脚が二列に並ん

で居りました。

正面講壇の向つて左は腰高窓、右はドアがあつて階段室となり、そこから階段を下りると牧師館玄関の板張りになつて居りました。

窓枠、柱、建具は緑色で塗られて居りました。何年か後、広田兄が塗替作業をして下さつた事がありました。つい昨日の出来事の様思われます。

戦災地にボンと建つて目立つた建物でした。中央町の交番で道をたづねたら、教会の西、・・・、南へ・・・、と道標の代りにされたとの事です。

教会の看板は巾十五纏、長さ四十纏位の厚板に野村兄の筆で墨痕鮮やかに書かれた、教会と日曜学校の二枚が並べて打付けてありました。後に小さい看板ではハッキリわからないからと当時三角柱形の看板を献げた方がありました。濃紺の地に白で「日本基督教団八幡前田教会」と書いてありました。何人かの方が看板を見て教会に来られる様になりました。風で倒れたりしてその看板も行衛不明になつて居りました。やつと今の立て看板を取り付けました。

つづいて夜看板が見えないし、門から玄関迄が暗い

ので照明を兼ねて看板灯が与えられました。

初めは門柱も無く、朝顔の蔓の手の様に割竹を並べて建てた柵を作つた事もありました。

長い間、電車道から教会玄関までの間が、雨が降るとぬかるみになり、板を並べてみたり煉瓦や石を置いたり苦勞の種でした。玄関の処が増築されて新しい玄関が出来てもなくコンクリートの舗道が出来ても雨の日も心配がなくなりました。

後に練瓦の門柱が出来、塀が出来ました。練瓦塀に掲示板をはめ込み、集案案内、標語を書いた事もありました。その練瓦塀の内側へ「犬の他小便するべからず」と書いた禁札が張られた事もありました。

門柱は出来ても門扉が付いて居りませんでした。ずつと後に丸橋兄の關係で陣山の鉄工所で作つてもらいました。

屋根材料の無い時でしたので黒鉄板で葺いてありました。毎年タールを塗れば下手な瓦より長持ちするとの事で、毎年塗つて居りましたが、何日頃から雨が降ると漏つて困りました。時には知らぬ間にふとんの上が濡れて居たこともありました。夜でも激しい雨の

時は飛び起きて洗面器、鍋、タライ、バケツ、あらゆるものを持ち出して並べたものでした。一度亜鉛鉄板で葺き替えました。此の頃まだ鉄板が貴重な頃でした。が瓦棒を入れてかつちりして頂いたので、それから後は雨が降つても安心して居りました。屋根の一番北側一列が足りないので古い板を使いました。後に講壇正面の壁に雨漏りによるしみが出たのが印象に残りました。

会堂のベンチは文字通り腰掛けで脚も可成高く奥行も広くありませんでした。然しあの当時新しい会堂に新しいベンチが並んでいるのを見るのは夢の様でした。ベンチが三種類ありました。黒くて重いベンチが会堂が出来た時白石大工が手造りで作つた檜材を主としたものでこれが十脚あり、次に手軽な黒いベンチ、これは尾倉町の長谷川建具製作所で作られたもので主として杉材が使われて居ります。黄色いニス塗りの重いベンチが最後に作られ、主として檜材を使つて丈夫に作られて居ります。初めベンチの背の後に蝶番で板を取付け金具で止める折たたみ式の聖書台が付けてありました。金具が取れたり蝶番が外れて困りました。最後に大野兄に頼んでラワンで丈夫な板をしつかり固定し

てもらいました。

会堂の床が三色に分れて居りました。最初の十三坪半の床は松板でした。西側と南側へ増築した時檜板を使い、ニスを塗りました。西側は赤黒く、南側の床は教会の出入口でニスが剥げて木地が出て居りました。

はじめ十脚のベンチを五脚づゝ二列に並べましたが風通しの良い集会でした。だんだん祈に応えて礼拝出席者が増えて風通しが悪く成つて参りました。更に十脚の軽いベンチが与えられました。奥行が狭いので割合に納まりました。それでも二、三脚は窓辺に添つて置かなければなりませんでした。

西側へ一間増築しまして講壇に向つて左に小さい部屋が出来て、初めて個室が出来て祈禱室にと喜びました。実際には余りその目的には使用されないまゝ事務室ともなり、日曜学校の教室となり、献身者室となり、色々活用されました。クリスマスには楽屋となつてマリヤもヨセフも、牧者も泥棒も靴屋のマーチンもアングルトムも此の部屋から舞台へ出て行つたものです。此の頃までトイレは牧師館と共用でだんだん不足して来ましたので、南側（玄関）へ約二間増築し旧玄関

を撤去して、階段を玄関内へ取り込んで、玄関を入ると右手にトイレ、正面下部に下駄箱、左へ階段上つてスリッパ棚と下足棚がありました。下駄箱は旧玄関に在つたのを使用しました。玄関を入つて右トイレの前の壁際に傘立て、正面にトイレ行の板張、左は階段で狭い玄関でいつも集会の際はゴタゴタ混雑してました。

玄関から会堂へ入る所に受付の机が置いてあつてそのまわりが立話の心地よい処でした。

新築の板張りの東端に小さい洗面所が出来て大変便利になり掃除も楽になりました。それ迄は玄関前の露天の水道しかありませんでした。

此の頃ベンチの一番きれいなのが出来て拡大された会堂に三列にベンチが置かれる様になりました。

ベンチの座布団も綿を持寄りて布も在り合せて作り、川原さんから布地を頂いてカバーを作りました。

此の頃になると二世、三世が増えて、さんびかの合の手に子供の泣声にぎやかか。説教の途中で感激の余りか子供の叫び声で後部の席では聞こえない状態になり、教会の客間兼母子室を東側に増築しました。

母子共に此れで氣樂になりました。

新築の会堂が汚れない様にと掃除をしました。殊に床板を糠袋でこすつたり致しました。時には俵雄、和義等にアルバイトに磨かせた事もありました。そのうちに内宮、山下、熊畑兄達が恵に感じて一緒に掃除してくれる様に成り後には青年達の手できれいに掃除される様になりました。

或る日、熊畑兄が大きい声でさんびか歌いながら掃除して居たのにバタツと声が止んで静かに成つたので、どうしたのかとそつとのぞくと鬼の様なたくましい顔を涙でクチャクチャにして目をこすつてすゝり泣いて居るのでびつくりしました。よく聞いて見ると、さんびか一九九「つみのこの身はいま死にて、きみのいさおによみがえり、かみのしもべのかずにいる、きよきしるしのバブテスマ」唱つて居るうち「罪の中にさ迷つて居た此の汚れ果てた者を主が救い、神の僕として下さつて、今こうして神の殿を拭かして頂いて、何と感謝して良いかわからない」。あの会堂の床はこうした多くの碎けた魂の感謝の涙で拭き込まれた又と無い素晴らしい会堂だといつも感謝して居りました。私の会

堂掃除の御用は夫れ以来終り他の御用に集中させて頂いて感謝して居ります。

冬は良く早天祈禱会を坐つて火鉢を囲み、又七輪を囲んでしたものでした。クリスマス感謝会も上敷の上に車坐になつて致しました。上敷もなかなか買えないで「ぜんざい会バザー」で資金を造つて買った事もありました。

天井の低い会堂でした。講壇の上で手を上げると天井へ届くと云う状態でした。鉄板葺ですから夏は暑くて窓の硝子障子を全部外しても人数が多くなるとどうにもならない暑さでした。講壇の上ではカツカツと頭がホテツて来るのがよくわかりました。皆さんに団扇を使つて頂きましたが、ポロポロ汗が流れるのが見えて気の毒でした。それから扇風機が一台、二台と与えられ、壁掛扇風機も台で「あおぎ」捲りましたが暑さはどうにも成りませんでした。思い切つて冷房機を入れてやつと涼しく成りました。

冬の暖房も物の無い終戦時代からですから、火鉢、七輪で薬缶をかけて「シューシュー」と立つ湯気やその音で目や耳で「暖かいぞ」と納得させた時代もあり

ました。火鉢には木炭、七輪には豆炭等、ストーブには石炭と燃料の入手難に苦勞しました。品物はあつても経常費で買えない。仕方なしに私達が暖まるのだからと暖房費の指定献金で賄いました。せめて駅で燃して居る様なストーブがあればと願つて居りました。河本商店のストーブが不用に成つたが良かつたらとの事で喜んで頂いたのがストーブ暖房の始まりでした。所謂ダルマストーブなので燃え出すと、ストーブが真赤になり、周囲に居られない程暑くなり、火がおちるとパタツと冷えてしまう状態で、絶えず「カチヤンカチヤン」石炭を投入しなければなりません。何とか静かなセンターストーブが欲しいと祈つて居りましたら、貯炭式ストーブが与えられ、更にセンターストーブの大きいのを買う事が出来ました。集会中に余りストーブを扱わなくても良くなりました。然し石炭をたぐのて烟突掃除が大変で少くも一週間に二回位しないと燃がいよいよ悪くなります。若い兄弟達が受持つて掃除してくれましたので助かりました。烟突掃除のいらないうストーブが、と祈つて石油ストーブを買いました。困つた事には此のストーブを置く子供達が倒しはし

ないかと氣になりました。最後にヒートポンプ式の暖房機を入れてそれらの心配は無くなりました。今も扇風機冷暖房機が新会堂で活躍して居ります。

昭和十五年の一月一日新年礼拝を終ると福岡へ行き福岡の新年聖会に出ました。昭和十六年から八幡で新年聖会を持たして頂きました。昭和二十年に戦災に会い廿一年廿二年と聖会は持てませんでした。廿三年から今年迄主のめぐみに依つて毎年新年聖会で恵まれて新しい年を主に従つて歩ませて頂きました。ただその間に一度かぜで高熱のため御用が出来ず休んだ事がありました。

昭和廿六年、廿七年頃藤村壮七師をお招きして聖会を開いて頂きました。藤村師は七十才余りで当時特急で二四時間位かかる列車の旅をして御用に当られました。当時としてはずいぶん高令だつたと思います。その後、連合聖会等で御会いする度に「もう一度九州で御用に立ち度い」と言われて居りましたがその機会が与えられませんでした。その聖会で多くの兄弟がめぐまれました。

献堂十周年の時姫路の末永師が来て下さいました。

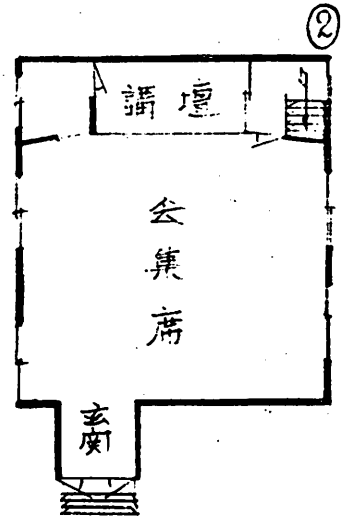
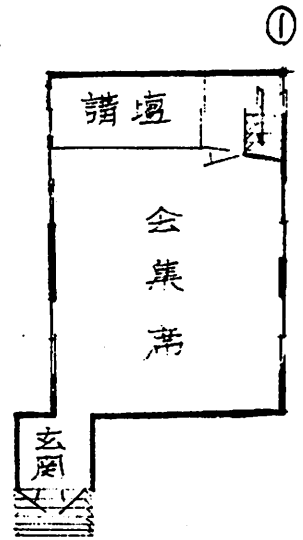
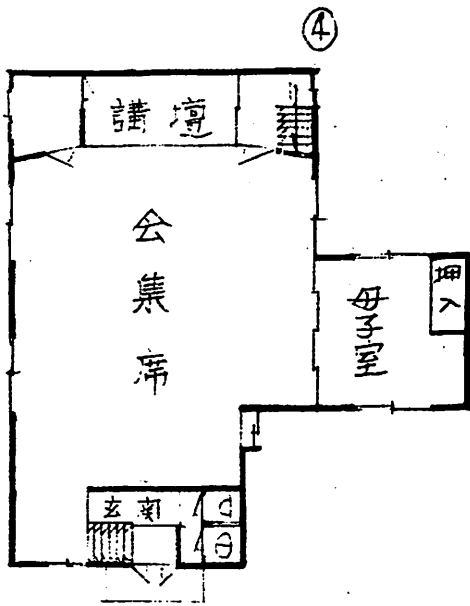
数年前は松岡師が二―三回御用されました。

聖会の前後に様々なたたかいたが、具体的に起つて参りましたが、その都度「汝等のたたかいたに非ず、エホバのたたかいたればなり（歴下20・15）」と主が王となつて勝利をとつて下さいました。

会堂での結婚式も数多く記憶も出来なく成りました。主の御祝福のうちに主を前に新しい人生に歩み出し、主の聖前にその歩みを整えて歩む人々が今も豊かな祝福のうちに守られて居るのを見て感謝して居ります。式だけ教会であるとの消息不明な何組かの方々は気の毒な事だと思えます。一組一組の結婚式に忘れられない思い出が会堂牧師館の此処彼処に残つて居りました。

此の会堂を通して主のみもとに召された聖徒達も忘れる事が出来ません。あの牧師館から私共の二人の子供も主のもとに召されて参りました。

会堂は尊い御用を終り撤去されましたがあのベンチで悔い改めの涙にむせんだ事、主の愛に心のうちがたぎり立つた日、声の限り主を讀えた礼拝、出演しなから感激したクリスマスの思い出、等々永く私共の信仰の旅路の思い出のオアシスと成る事でしよう。

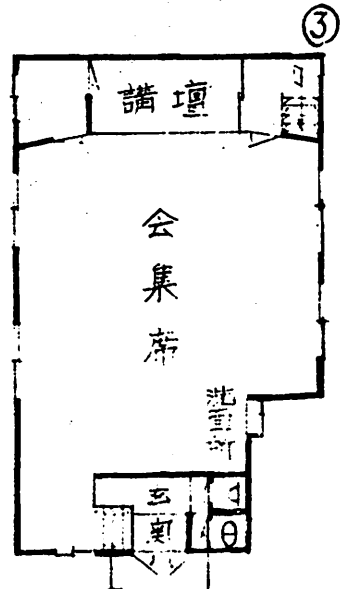


① 昭 22・9

② 昭 29・4

③ 昭 33・10

④ 昭 39・9



旧会堂の思い出

講壇の横の祈り室

正野 真宏

旧会堂で一番思い出多いものはいえば、それは講壇の横の祈り室です。そこが、日曜学校中学生男子の分級の室だつたからです。

一坪ちよつとの小さい室で、教会の事務室にもなつており、事務机と書類戸棚それに長椅子がそれぞれ一つづつ置かれ、後に書類金庫が仲間入りしました。そのうえに中空にはつり棚と教会用の傘が沢山ぶらさがつておりましたから、この室は面積の割には大きな働きをしました。

分級の時は、木製の丸椅子を三、四脚もつて来て前述の長椅子と向い合わせに二列に並べれば七、八人は座れます。しかし何様狭いので、前の人と膝がふれ合うほどでした。戸を閉めればもう密室です。小さいながらも楽しい雰意気の中で、文字通り膝をつき合わせたの分級でした。

窓は一間の窓が一つありましたから夏は適当に風が

入りましたが、入口の戸を閉めているので袋小路になつて、やはり暑かつたことを思い出します。

入口の戸を開れば風通しは良くなるのですが、隣りの二級の話し声が入り込んで来ますので、どうしても閉めざるを得ません。仕方なく私は、左手に聖書、右手にウチワを持つてそれを生徒の方に向けてあおぎながら、風のサーピスをしつつの御用でした。しばらくして教会の扇風機が増え一台借りてきたので、自家製風のサーピスは終りました。

ところが、入口の戸の・・・あれは何と云うのですかね。戸を閉めた時、カチャンという音をたてて戸が自然に開かないようにするやつ・・・その何とかがあまくなつて全然役に立たないんです。礼拝堂側からはひつかけの止め金がつけてありましたが、内側からは何もありません。止め金をかけてから中に入るという器用なことではできませんから、自然に閉まつたままにしておきますと、少し風が当ると音もなくスーと開いてしまいます。その度に話しが中断しました。

そこで紙を折つて間にはさみ込みました。遅れた生徒が入つて来る度にストーン、ストーン。その都度やり直

しです。

日曜日になると今度は取り変えより今度は直そうと思いつつも、その度に忘れてしまいたいとうとう修繕しないまま安東さんに三級を引継ぎましたのでそのままでした。

私は、「ぶどうの木オ一号」で落才教師という題でお話ししたように、生れて初めて生徒の前で聖書の話をしたのもこの室です。あの時は前夜一生懸命憶えた説教を忘れてしまい、支離滅裂の話をしてしまいました。そして、恥かしさと自分のなさを耐えかねて泣いて神様に訴えたものでした。

あの時の子供達は、今どうしているでしょうか。

私が今日あるのは、あの小さな室で子供達の前に聖書の話しをさせていただいたためであり、そのことによつてどんなに整えられ、祈らされ、恵まれていつたかわかりません。よくぞへたな話しを聞いてくれたと子供達に感謝するばかりありません。

この室でクリスマスの人形劇のために生徒と一緒に人形を作ったことを思い出します。

初代の伊規須先生の時から会堂が取り壊される時ま

で何十人かの中学生を神様はこの室に送つてくださいました。彼らは今、成長してちりぢりに別れ、またあの小さな室もはや見ることはできません。しかし、彼らが聞いた神様の言葉は消えることなく、彼らの心の中に生きていて、きつと実を結ばせてくださるにちがいないと祈っています。

旧牧師館と私

高木敏夫

私は今、この原稿を書くにあたり、入信前後の日記帳や、アルバムを取り出し、その当時に想いを馳せた。私の心の中に、過ぎし日の思い出がなつかしくよみがえつた。そして、「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従つて召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さる」という聖言をしみじみ、実感としてかみしめ、神をあがめた。

旧牧師館と私との関係は、切つても切れない深いつながりがあるように私は思う。それは、いいかえれば、榎本先生御夫妻と私との関係なのである。

私は、昭和二十六年五月二十日の聖日に、始めて前田教会の礼拝に出席した。そして、一ヶ月後の二十四日礼拝後の総会席上、先生より皆さんに紹介していただき、当教会での求道生活を始めたのである。

この教会に才一步を踏み入れた時より私の心に、大きな感動と変化があらわれたのを自覚し、もう、この教会からはなれまいと心に誓つた。そして、礼拝を

始め各集會に、切なる渴きと期待をもつて出席した。神は、「渴ける者に水を注ぐ」のお約束の如く、私を豊かに満たし、日々恵みの高みへと進ませて下さつた。

七月二十八日は、私にとつて、うれしい事が二つ重なつた。その一つは、東兄妹と早天祈禱會で始めて口をきくようになり、その住所と名前を知り、二人が兄妹ということを知つたことである。それまで、毎日、仲むつまじく連れ立つてくる二人は、果して何だろうか？。兄妹だろうか？。恋人だろうか？。それとも新婚なのだろうか？。興味深くながめていたものである。その二は、その日會堂の掃除に行き、帰りに始めて牧師館に寄り、先生御夫妻に感謝の意を表わし、そこでお二人から歓待を受けたことである。

丁度、御一家は昼食時であられたが、お二人は笑顔で暖く迎えて下さり、一緒に食事をするようになつて下さつた。遠慮することを知らない私は、そのまま有難く御馳走になつた。その当時の牧師館は、われらの見るべき姿はなく、慕うべきみばえもなかつた。

実に質素極まる生活のように見受けられた。しかし、お二人は、そんなことには全く心をかけていられない

様子で、一家には笑いが絶えないようであつた。私は生まれ始めて始めて、そこに、本当の家庭というものの姿を発見した。そして、これがクリスチャンホームなのだと感じとつた。この日をきつかけに私の牧師館出入りが始まつたのである。私は持ち前の無遠慮さを發揮して、牧師の給料や生活のことまで立ち入つて聞いたり、「神について」「信仰について」などいろいろと愚問を發したように記憶している。「牧師館のお茶を飲む回数に比例して恵まれる」ということをきいたが、これは、確かに一面の真理であると私は自分の経験からそれを信じている。

このようにして、前田教会での求道生活五ヶ月を経過した十月二十二日は、私にとつて生涯忘れることのできない新生の日である。この日、八人の兄弟と共に、大蔵川の上流においてバプテスマを受け、神の子としての才一步を踏み出したのである。その日、その時の感激とよるこびは、到底いいあらわすことができなかつた。その日の午後、我々のために、教会で感謝会を開いて下さつた。私たちはそのころ、まだ口に出し

てお祈りすることができなかつたので、それぞれの愛歌を歌つた。私は、自分で歌えるさんびかがなかつたので皆さんから一緒に歌つてもらつた。私はその夜、感謝と感激と喜びのため、一晚中泣き明かした。そして、今後は残る生涯身も魂も神に捧げようと決意した。又、前田教会と先生からは一生はなれまいと心にきめ、そのことを真剣に神に祈つた。

この受洗によつて全く新しくせられた私は益々神を知りたいとの欲求にかられ、そのためには、牧師館に住まわしていただき、全集会に出席すると共に、先生の日常生活を通して主に従う道を学びたいと考え、この事を十日余り熱心に祈り求めた。機会を見て、先生にこの願いを申し出た。その当時は、三男の誠ちゃんも明日をも知れぬ重態であつたが、私の切な願望を見て同居をお許し下さつた。私は大喜びで十一月十二日東浜寮から牧師館へと移り住ましていただいたのである。

その頃は、牧師館にまだ水道がなく、隣家の中川家にあるポンプ式井戸を共用していた。炊事、洗濯、風呂などの水扱みは、先生が長靴をはいてよくやつてお

られた。隣家との距離が七・八メートル位あり、風呂の水扱みは仲々の重労働であつた。あとで、ブリキの樋を渡して直接ポンプで送り込むようにしてだいぶん楽になつた。私も、水扱みや床ふき、早天祈禱会のための七輪の火起しなど何んでもさせていただいた。

朝五時から起きて、うちわをバタバタさせながら豆炭をおこし、火鉢にも火種を分けて、二階の会堂に運んだものである。その頃はストーブもなく、冬の早天祈禱会も七輪や火鉢で暖をとつていた。それでいて、寒いとも、不自由とも感じることをなく、かえつて、感謝と喜びに溢れていた。

さて、ここで、二つのエピソードを紹介したい。

当時牧師館には、二つの洗面器があつた。同じ色で同じ型であつた。その一つは洗面用、もう一つは、誠ちゃんのおしりふき用であつた。誠ちゃん用は、くぎの先かでMと少さくほりこんであつた。ところが、しばしばこの二つの洗面器が混同され、Mの洗面器で顔を洗う羽目になることがあつた。もう一つは、オシメの問題である。御承知の如く牧師館は日が当らず、そのためオシメも部屋に干して七輪の火で乾かしていた。

これもまた、オシメの下を男がくぐらねばならぬ羽目に度々たち至つたのである。まだ独身であつた私はこのことがどうにも我慢がならず、奥さんに文句を言つたものである。そのあとで私が結婚し、子供が出来た時、雨の日など部屋中にオシメを干し、その下を通つても、何とも感じず、子供のオシメをふいた洗面器で顔を洗つてもきたないと思うこともなかつた。かつて奥さんが「誠ちゃんのおしりをなめてもきたないと思わない。」と言われた言葉を思い起し、親というものほんなものだということ、自分が人の子の親となつて始めて悟らされた。それにしても、迷惑をかえりみず、無理に頼んで同居させてもらいながら、よくもあんな無礼なことを言つたものだと思つて、誠に誠に申し訳なく思う次才である。

次に、当時牧師館の食堂の天井はベニヤ板が張つていなかつた。会堂の板張りがそのまま天井になつていた。ところが松板の一ヶ所を虫がくい穴があいていた。それが丁度、炊事場の上あたりで、夕方会堂掃除をしていると、下から食欲をそそる匂いがたちのぼり、東さんはよく、床の穴に顔をくつつけ、クン、クン、と

鼻をならしながら、きょうのおかずは何々と、ジエス
チャーたつぶりのしぐさで我々を笑わせたものである。

私が牧師館にお世話になつたのは、翌年の三月二日
までであつた。三月から元の交替勤務になつたのであ
る。交替勤務は時間が不規則なため、その頃健康が勝
れなかつた奥さんに負担がかかるので、教会を辞し、
また、以前の寮に入つた。この間、約四ヶ月の短い期
間であつたが、私の信仰。人間形成に大きな影響を与
えたことを強く確信し、先生御夫妻の御厚情と薫陶と
を今もつて感謝している次才である。

それからしばらくして、牧師館に水道がとりつけら
れた。私は、自分の家に水道がとりつけられた以上に
うれしく思つた。「ああ、これで先生達も楽になられ
る」と心からよろこんだ。次に洗濯機が備わつた。電
気冷蔵庫も備わつた。炊事場や風呂場の改造も行なわ
れ、いちいち、つつかけをばく必要もなく、すべてが
便利になつた。以前、先生御夫妻の苦勞を知つてゐる
私にとつて、その一つ一つが大きな喜びであり感謝で
あつた。

私はつねづね、先生の住まわれる牧師館より立派な

家には住むまい、先生より先には便利な電気製品を使
用すまいと心に決めていたので、牧師館のあとを追つ
て我が家にも、水道がとりつけられ、電気製品も次々
と備わつた。

この度、主は丸山兄の心を感動させ、愛兄を用いて
牧師館、会堂と全く一新させて下さつた。我々が思い
願つていたものよりはるかに勝る素晴らしい牧師館で
あり会堂である。丸山兄には、神様の恵と先生の愛に
感じ、大阪での事業一切をはなれ、文字通り寝食を忘
れ、精魂をかたむけられたのである。

新しい牧師館に移られた先生御夫妻のお喜びと感謝
の姿を見て、私もうれしくてうれしくて感謝で感謝で
一杯である。私は、先生のお住について日頃、心苦し
く、申し訳なく思つていたが、これで安心である。だ
が、私に一つ気になることがあつた。それは、河本の
おばあちゃんのことであつた。皆さんご承知のごとく
今は天に在る御先代と共に、恵に感じ会堂を献げられ
たのである。私共とはくらべることのできなない沢山の
思い出が旧会堂にあるにちがいない。その会堂を撤去
するにあつて、一人残られたおばあちゃんは「どん

そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。」

(詩篇一〇六：一)

な感慨をおもちなのだろうか」ということであった。いよいよ撤去にかかった日、その作業を見ておられたおばあちゃんに、その御感想をそつとおたずねした。その質問に対しておばあちゃんは、階れやかなお顔で、にっこり笑い、「牧師館も会堂も新しくなるのですからこんなうれしいことはありません」と答えられた。私は、自分の目に涙がにじむのを覚えた。

さて、この度の改築にあたり、外部に援助を頼らず、銀行にも頼まず、只、恵に感じた会員一同の献金のみによつてすべてが満たされたということは、何にも勝る大きな証しであり、また、よろこびである。

我々は、この体験を通して、『主は生きていまして、信じて依頼む者を決して恥ずかしめ給わない』ということをしつかり心に銘記したのである。

この信仰は生涯持ちつづけると共に、子孫にまで残したいと思う。

最後に、ここに至るまで、すべての点で豊かに恵み導いて下さつた父なる神に、心からなる感謝を捧げ奉る。

「主をほめたたえよ。主に感謝せよ、主は恵み深く、

旧牧師館の思い出

榎 本 和 義

私が何才の時から、旧牧師館（以下、牧師館とする）に住むようになったのか、正確に覚えていませんが、記憶しているかぎり、「わたしの家」と言うのは、牧師館のことです。現在でもなお、遠く離れて、懐かしく思い出す「我家」は天井が低く、薄暗いあの取り壊された牧師館のことです。それだけに、牧師館に關してはあれこれと、至る所に子供の頃の生活に密着した記憶があつて、忘れがたいものです。

電車通りから、北へダラダラと坂道を少し下つて、河本商店の横から細い路地道を左に入つて、突き当りに牧師館の玄関がありました。この細い道は表通りから玄関まで、約十メートル程でしたが、立派な御影石の平らな敷石が並べられていました。これは河本商店前の溝蓋に使つていた平石を教会がもらつて、夏の暑い日に玄関までの道に並べたものです。それまでは、雨が降ると、途中の道が泥沼になつてしまい、牧師館を訪ねてこられる方々が大変困つておられたのです。

この道の突き当りが牧師館の玄関で、玄関のすぐ右側に古びた小屋がありました。私たち家族はこの小屋を「バイク小屋」と称していました。ここには東さん（現在、別府野口教会牧師）が寄贈して下さつた、スキのオートバイが置かれていました。父がこれに乗つて、戸畑の家庭集会や訪問に出かけた時代がありました。父がこれに乗つたが、数年たつて、兄と私が高校生になり、オートバイに乗れるようになると、父に代つて、息子たちがオートバイを愛用し、「カミナリ族」の先駆となり、バトカーに追いかけられるなどして、周囲の人々から「教会のドラ息子」とひんしゆくを買つていたようです。その当時は、高校生がオートバイに乗ることは珍らしい時でしたから、私たちはとても得意だつたのです。その愛すべきオートバイも、いつなくなつたのか覚えていませんが、オートバイがなくなつてからも、ずつと、この古びた小屋だけは物置き小屋として残つていました。

玄関の左前の所にも、約二坪程のレンガと漆喰壁で出来た納屋のような建物がありました。これは中川さんと云う東隣りに住んでいた人の家（後に教会の別館

とをる)に附属したものです。中川さんは一時鯨肉の小売店をしていたので、この納屋で鯨の脂身をゆでて、「おばいけ」(尾羽毛)を作っていました。

これが悪臭と煤煙で私たちを大変悩ませたものです。ところが、中川さんが仕事を止めて、家を売って移転したあとで、教会はこの納屋の建っている土地を新しい持ち主から買い取ることが出来ました。それ以後、この納屋を取りこわして、玄関の前が少し広々とした感じになりました。

牧師館の玄関はあまり立派なものではありませんでしたが、ここを利用した人の数はどれだけになるでしょうか。この玄関に入ると、一間幅の板張り廊下がつて、すぐ左側には会堂(二階)へ通じる急な階段が廊下の上がり口を半分占めており、階段の裏側が見えていました。(後になつて、この場所を利用して、靴箱と大工道具入れを造りました。)右側には牧師館用の便所の入口がありました。

臭い話になります。このトイレは水洗式になるまで、大変やつかいなものでした。と云うのも、容量が小さく、すぐに一杯になつてしまふからです。恐らく、会

堂専用のトイレがなくて、共同利用していたので、会員が増えるにつれて、排出量も一方的に増加したからでしょう。市役所が実施してくれる定期的な「汲み取り」作業では間に合わなくて、あふれるばかりになることがたびたびあり、そのたびごとに、父が清掃課に電話して、特別に取りに来てもらっていました。

しかし、あまりたびたびなので、すぐに来てくれなかつたり、皮肉を云われたりしました。しかも、その時は教会専用の電話がなくて、いつも河本商店の事務所で電話をかりていましたから、清掃課への電話のたびに、事務所に居られる方々はこついでつたろうと思えます。しばらく待たねばならない時などは、父が穴を掘つて処理した事もありました。

オ二回目の会堂増築の時に、会堂専用のトイレが出来て、状態が良くなりました。この頃の不愉快な記憶があつたので、前田町地区に市営の下水道が完備されて、水洗化区域に指定されるとすぐに牧師館のトイレをまず水洗に改造するように父に勧め、お金がなかつたので、市の水洗化促進の資金を借りて、さつそく水洗に変りました。

トイレの話はこの位にして、次は玄関から靴をぬいで、廊下へ上る所の框についてです。玄関の上框と云えば、どこの家でも立派な木が使われて、きれいにみがかれ、手入れされているものですが、牧師館の上框は全く見るかげのないものでした。と云うのも、この玄関は子供たちの工作場でもあつたからです。

玄関の框に板を置いて鋸を使つたり、かんなでけずつたり、釘を打つたり抜いたりして、上框の柱といわず、廊下までさんさんに痛めつけられて、上框の角がまるくなり、ささくれ立っていました。妻の話によれば、牧師館を訪問して、ひざをついて履物を揃えると、かならずストッキングをだめにしたと云うことです。

それまで、ちつとも気がつきませんでした。あれだけさがさになつた所では当然考えられることだと思ひました。恐らく他にも被害者が多数おられることでしょう。でも、この工作場から、夏休みの宿題が完成され、本立て、額縁等が生産されたものです。

玄関から廊下へ上がるとすぐに目につくものが、会堂へ通じる階段です。この階段は、傾斜がかなり急だつたので、両手に物を持つて、降りてくる時など、少

々こわい程でした。何人かの人がこの階段で足を踏みはずして、痛い思いをされたはず。でも、私たちが子供には雨の日の遊び場として、けつこう楽しんでました。この階段の横に裸電球がぶらさがつていました。この電灯は家中が螢光灯化されてからも、相変らず白熱電球のままでした。

廊下にそつて右側に四畳の部屋と六畳の部屋が並んでいました。各部屋とも廊下側は障子になつていました。この障子はいつも破れていましたし、骨も折れて奇妙な障子でしたが、よく障子紙の張り替えをさせられました。六畳の部屋に接している廊下の部分が食堂兼居間として使われていました。

後年、廊下の途中にベニヤ板で仕切り壁を作り、戸をつけましたが、それまでは、玄関から真直ぐに、また、会堂から階段を降りてくると、すぐに居間から台所までまる見えだつた時期があります。この食堂兼居間には立派な堀ゴタツがありました。これは、大野さん

(現在大阪在住)が作つてくれたものです。それ以前はもつと小さなもので、練炭を入れるようになっていました。このコタツで食事をしたり、遊んだり、年中

家族が集まるところでしたし、同時に牧師館を訪ねてこられる方の客間でもありました。来客があつて、夕方遅くまで居られると、私たち子供の夕食が遅くなり、お腹をすかせて、お客さんが帰られるのを待つていたこともあります。夏でも、このコタツは、火を入れないで腰掛式に利用されていましたが、板張りなので、長時間座つていると腰が痛くなつたものです。このコタツの部屋も会堂の才三回目の増築（会堂に和室を作つた時）に際して、一坪程東側に拡張されて、ずい分広くなりました。この時に台所と風呂場も大きく改築され、特に、台所は南側に窓が出来て明るくなり、台所の床も居間と同じ高さになりましたし、流し台もマイル張りになつて、とても便利になりましたが、それまでは大変不便な台所でした。

まず、台所に立つために、下駄をはかねばなりませんでしたが、これはすぐに、すのこ板を敷くことで解決されましたが、床の高さが居間と違つていたので、台所と居間を往復するのに必ず上り降りしなければならず、その上、水道がなくて、十メートル程離れている井戸から水をバケツで運ばねばなりませんでした。

いつ頃水道が完備されたのか覚えていませんが、かなり長い間、井戸水を汲まされた思い出があります。台所の流し台の横にはいつもバケツ二杯の水が用意されていましたが、なくなれば、夜であろうと、雨が降つていようと、汲んでこなければなりません。

台所仕事位ならまだしもですが、風呂に水を入れるとなると大変な仕事でした。バケツに四十杯から五十杯程の水を汲み込まねばならず、小学生の頃には、よく水汲みをさせられました。そのうち、バケツで運ぶのは大変なので、ブリキ製のパイプ（雨樋の立ちあがりパイプ）を使つて、風呂桶まで井戸のポンプから水を送る工夫をしました。これは我家にとつて、とてもすばらしい文明の利器でしたが、井戸から風呂桶まで、数メートル離れていたので、水の重みでパイプが折れて、何度も修理したり、途中で支柱を設けたりしました。その結果、バケツで運ぶ手間がはぶけて、私たちはポンプを押すだけですむようになり、大変楽になりました。そのうちに、水道がやつと引かれて、これらの苦勞もなくなり、さらに、階段の上り口の所には、立派なタイル張りの手洗いまで出来ました。

牧師館が解体されるまでの長い間で、最も変化の少ない部屋は丁度牧師館の中心をなしている六畳と四畳の二つの和室です。ここは主に寝室として使っていました。と云つても、現代のように部屋を機能別に使いわける程部屋がたくさんありませんから、昼間は専ら子供達の遊ぶ所でした。畳をのけて、全部板張りの洋室にしようか、と云う話もありましたが、結局最後まで、畳の部屋として使われました。この二つの和室は結婚式などの時には、花嫁さんの控室になつたり、披露宴の会場になつたこともあつたようです。オ一回目の会堂増築で、牧師館にも西側に一間幅の板張りの廊下が出来たので、この二つの和室には光が入らず、昼間も電灯をつけねばならない暗い部屋になつてしまいました。増築以前は、外に面した明るい部屋でした。六畳の部屋には、立派な床の間がついていましたが、床の間として役立つよりも、タンス置き場として使つたり、ついに三十センチ程の高さで板を張り、そこにワラ布団を置いて、固定したベッドを作り、母の寝室にしてみました。父は畳に布団で寝るより、ベッドの方が好きだつたので、子供たちが成長するにつれて、病院

で見かけるような鉄製のベッドを少しづつ買つて、畳の上に並べて使つていた時がありました。

会堂の床板がそのまま牧師館全体の天井になつていましたから、会堂の足音や物音がすぐ下にひびいてきました。ですから、日曜日など、集会がある時は牧師館にもきやかな音がしますし、階下に居て足音を聞いただけで、どなたが会堂に居られるか、推測出来る程でした。しかし、一番困つたのは「音」ではなく、天井のすき間（つまり、会堂の床板のすき間）が大きくて、そこからゴミやホコリが落ちてくることでした。土曜日など会堂の掃除をすると、小さなゴミやホコリが牧師館の各部屋に落ちてきたものです。これを防ぐために新聞紙を短冊型に切つて、すき間にはりつけました。これでどうか少しはよくなりましたが、完全に、と云うわけにゆかず、その上外観もあまり良いものではありませんでした。しかし、会堂のオ一回増築の時に、天井全体にベニヤ板を張つてもらうことになり、この問題は解決したのですが、天井の低いことはどうしてもなりません。一方、牧師館の物音や話し声が会堂へ筒抜けになり、祈禱会や伝道会など夜の集会の

時に、突然時ならぬ笑い声が階下の牧師館から聞こえてきたり、夕食の焼魚のニオイが立ちこめたり、さまざまなハブニングがあつたものです。でも、これらのことが、教会に來られる方々の気分をほぐすのに役立つ、気取らない教会にしていたのではないでしようか。

先にも書きましたが、会堂が狭くなつて、オ一回目の増築が行なわれました。この時は建物の西側を六尺拡張する工事でした。会堂が広くなつただけ、牧師館も広がりました。これが、和室をはさんで玄関側（東側）と同じような一間幅の廊下になつたのです。廊下と云うよりむしろ、細長い部屋になつたので、ここにソファと肘掛け椅子を置いて、牧師館初めての応接室が出来たのです。増築された時、会堂から屋外をまわつて、この応接室に入れるように、南側の所に入口が設けられていましたが、あまり役立たないので、この入口をふさいで、全部板張りにしてしまいました。この応接室は結構住み心地の良い所で、南端に机を置いて一部分を父の書齋として使つたり、テレビを見る所でもありました。

四畳の和室の北側半分に一坪半程の板張りの部屋が

ありました。ここは主に子供たちの勉強部屋でしたが増築によつて二倍の広さになり、中学生の頃、私たちの机を並べていましたので、ちよつとした事務所のような風景でした。しかし、中学、高校と進むにつれて、子供たちがそれぞれ個室を欲しがるようになり、あれこれ工夫しましたがうまく行きませんでした。と云うのも、牧師館にはブライバシーを守れるような壁で仕切られた部屋はどこにもなく、障子や襖を取り払うと文字通り、たつた一部屋になつてしまふ状態だつたらです。オ二回目の会堂増築の時、（この時は会堂の玄関を改造して会堂専用トイレを造るだけで、牧師館に変化はない）この時、会堂のトイレの上に、屋根裏部屋のような空間が出来ました。そこで、さつそく兄が、机と寝具を持ち込んで自分の部屋として使つていました。が、とても狭くて、その上、部屋が高い所にあるので入るのが大変ですし、窓もなく、トタン屋根のすぐ裏なので、夏などこの部屋に居ることは到底できません。ですから、一年も続いたでしようか。すぐに不便であきらめました。しかし、この狭い小さな場所でしたが、自分だけの個室を持てたので大喜びしてい

たのを思い出します。

私と兄の大学受験が近ずいてくると、どうしても独立した勉強部屋が欲しい、と云うことで、丁度丸山さんが居られたので相談して、牧師館北側の空間に三坪程の部屋を建て増ししてもらうことにしました。

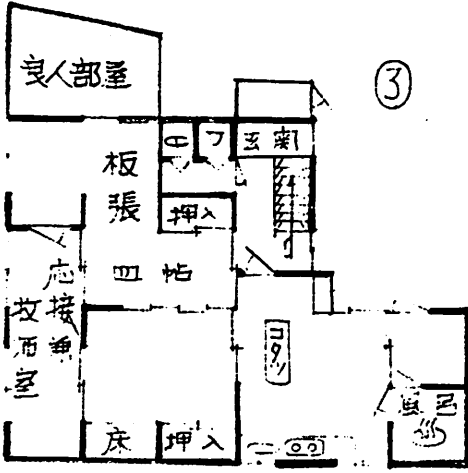
しかし、この時期に丸山さんが大阪へ移転されることになつたため、丸山さんの友達に紹介してもらい、とても安い費用でなんとか部屋を造ってもらいました。

安普請なので、夏は暑く冬は寒い部屋でしたが、牧師館の中で一番奥になる上、二階がないので割合い静かな部屋でしたし、自分の部屋を持って大変嬉しく、私は大学へ行くまで二、三年この部屋ですごしました。

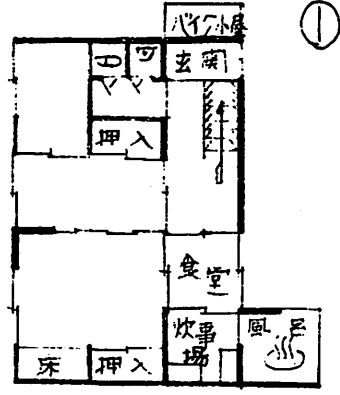
この後の大きな変化は才三回目の会堂増築の際に、先に書いたように、台所、食堂、風呂場が近代化されたわけですが、この頃すでに私は大学に行つて、牧師館を出ていましたので、あまり印象に残っていません。

こうして、振り返つて思い出してみると、牧師館のすみずみに、その場所ごとに付随する出来事が目に浮かび、それに伴つて言葉に表わせない気持が迫つてきます。文字通り、最小の必要だけで出発した牧師館の

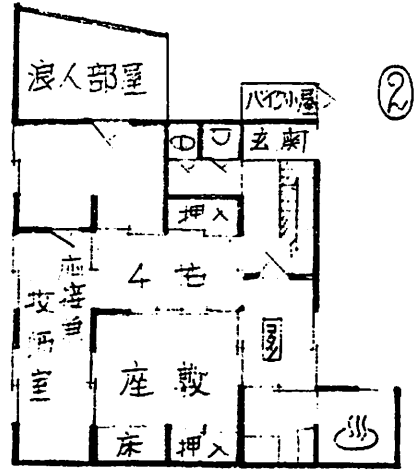
生活でしたが、神様は約束通りに、信ずる者を辱めず、飢えさせることもなく、今日まで導びいて下さつたと確信します。当時は牧師館の生活に不平、不満を保持していました。今考えて見ますと、不足した中を、不便な中を通して、訓練されたのだと思いますし、そのことを感謝出来るようです。



③



①



②

① 昭22:9

② 昭29:4

③ 昭39:9

再 会

正 野 員 子

私が河本さんに再会したのは、五十年振りでございます。

再会と言つても説明しなければ思い出せない程年月はあまりにも過ぎ去つておりました。

いつか話して見ようかなと思つてすでに一年余り過ぎた或る日、奥様のお招きを受け、はからずも御自宅に参上の機会が到来致しました。

その時丁度御主人はソファによりかかつていらつしやいました。

堂々たる御体格、栄光の白髪、泰然自若として、何か近づきにくいものを感じましたが、よきチャンスを失するなかれと心の内に言い聞かせて、昔の事を切り出しました。

「私は材木屋の正野でございますが」

別に驚かれる御様子もなく、全くの無表情

「あゝそうですか」

とおつしやつた。きつと父を思い出して下さつたので

しよう。その頃の私はたしか十二、三才だつたと思ひます。

「私の父が消防組長だつたので、私方でよく皆さんと飲んでいましたね。随分あの頃は威勢がよかつたですね」

お笑いになるだろうと思つていましたが、決してお笑いにはなりませんので少しがっかりさせられました。

血気盛りの沢山を消防手が酒になると脱線して六十畳敷一面が修羅場となり河本さんもその中のお一人でございました。お若い時のそのようなことは聞きたくなかつたのかも知れません。

私はすぐ話題をかえました。

「わたしは沢山おられた中で、あなたのお名前とお顔だけはちやんと覚えていました。

あなたがほめて下さつたから。」

「.....」

御記憶がないらしく不審なお顔をなさいました。

私は言葉を続けました。

「父が私に人名簿を書かせましてね、

私の書いたものを、あなたが見られて、

『うまいなあー』とおつしやつてとてもほめて下さいました。子供心にそれがうれしくてあなたをわすれませんでした。あの頃よりずっと太られましたね。」

「……」

会話はそれだけで終わりました。そして初めての終りでございました。それで無口のお方という印象しか残っていませんでした。

もうその頃はお体の方がだいぶんお悪く、御自由にお話しがお出来になられない御様子でございました。河本さんのことは亡くなられた後、信者の方や牧師先生からお聞きし、御立派な御人格と御信仰を初めて知ったような事でございました。

昔のことしか知らない私にとつてそのように御聖別なし給うた主を崇めずにはいられませんでした。

先日御病人を御訪問したその帰えり途、同行の河本の奥様より驚くべきことを聞かされました。「教会の土地はあなたのお父さんから買った。」とおつしやるのです。当時のことを色々聞いています内、その事を確認することが出来ました。

その土地の持主が前田郵便局長をされていられた松

本氏で私の縁づき先でございました。

松本家は終戦の年の八月八日八幡の大空襲の際、一家全滅致しました。私の妹もその子供も幼稚園に行つていました。が母親の腕の中で防空壕の中で死んでいました。そして松本家の父と母とその年頃の娘さんも、私の父がその死体を探し求め確認したのでございます。その後敗残兵としてビルマより帰還した妹の夫は八幡の焼野ヶ原に立ち、家は焼かれ、その上一家は全滅の悲報を聞き、茫然自失孤独と失望を酒でまぎらせ、身を持ちくづし、またたく間にぼろ大の土地財産を人手に渡し、あまつさえ多くの人に迷惑をかけるようになりました。

河本さんに頼まれて父がお世話したのもその頃であつたでしょう。その土地に教会が建てられ、私は何も知らずその教会を選び、多くの人々が今も救われ、私も家族もそこで救われたのでございます。

河本さんから買つていただいたことはすばらしい事でございました。

私の妹は、土地や財産を持つた裕福な家に嫁ぎ幸福であるべきはずでしたのに、戦争のぎせいとをりまし

た。虫の知らせか、当時大分に疎開していた私の所に五才の女の子を連れて三日間とまつて、帰えつた直後に空襲に会い尾倉町防空壕の中で、何百人の人と共に、むし焼死されたのでした。もう一日引留めていたなら、死ななくてもよかつたのにとくやみました。一寸先は闇、何が起るか、私共ではわかりません。そして財産が、どんなに沢山あつても、人の命は持物によらなと聖書にあることばが妹を通してよくわかりました。「見ゆるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くのである」

このことを通してイエスキリストを信じる信仰がどんなに偉大な価値のあるものであるか

『体の訓練は少しは益する所があるが信心は、今のいのちと後の世の命とが約束されてあるので万事に益となる。これは確実でそのまゝ受け入れるに足る言葉である。』

私はこのみことばを信じて、心から主を崇めて喜ぶのです。河本さんは、ほんとによいことをなさいました。

「彼は死ぬれども今なお語る」

この記事は、河本さんの亡なられた当時書いていたもので、引出しの整理をしていた時発見されたものです。十年以上にもなると思います。少し手を加わえ、今の心境を書き加えて主に栄光を帰し崇めたいと思います。

河本さんの捧げられた教会も河本さん御本人も今は見ることは出来ません。見ゆるものすべてに終りがあります。朽ちるものはやがて朽ち消え去ります。

キリストにある信仰者は、朽ちないものでまかれ栄光のからだによみがえられ、キリストの体なる教会も同じ真理で、見ゆる建物は風雨にさらされ卅余年耐え、使命終つて私たちの前から旧会堂は消え去りました。然しキリストの十字架の福音は生きて、敷地も会堂も倍する広さと、以前とは比べものにならない程の立派な新会堂になつて生れ替りました。そこにイエスキリストの変らない永遠の命に満たされたキリストの証があり、いのちの泉から、かわきに應じて、私共にそそがれております。いくらでもくみとることが出来ます。自分だけ満足するのでなく、隣人にもわけ与えて上げたいと思います。

河本さんとの再会は始めての終りになつて、あつけないものでありましたが、印象的で、語らず言わずの内に河本さんの中にあるいのちの泉にふれた思が今なお語られているように思われ、やがて才二の才三の河本さんのいのちが引継がれて、いのちの教会が現れゆくように思われてならないのです。

五十・七・七

七夕の日に

旧会堂の思い出

大 口 和 子

最初黒崎に越して参りました時に、母が「前田教会に榎本先生が居られるから行こう」と連れて来てくれました。その時は、この両方の部屋が無くて真中だけでした。けれど、それでも狭いと思いませんでした。その時はこんなに肥えてもおりませんでしたけれど……。神様は続々と会員の方を導いて下さいまして、本当に溢れる程になりました。建て直さなければならぬ程にして下さいました、本当に感謝に堪えません。

その頃は、「二、三人わが名によつて集う時、我もその中にあるなり」と、この真中に坐つてクリスマスなんかさせて頂いたと思つていますけれども、今はこんなに多くの方々を導いて頂き、又新しく会堂を建て替えられる様になります事、神様のお恵みは本当に素晴らしいと思います。

私は最近シロアム会の関係であちらこちらの教会に行く事がございますけれども、この教会ほど祝福されている所はほかに無い様を気が致します。亡き母も天

国で喜んでいてくれる事と幸いです。

私達はこの教会で結婚式をさせて頂いて、この下のお部屋で披露をさせて頂き、神様がこんなに導いて下さいました。力もこの教会で育てられた様なものではないです。感謝に堪えません。益々励んで参りたいと思っております。

以上

// 扉カ

東 哲 郎

扉を押さなくなつて、もう五年になる。

昔のことだつた。扉があつた。古い木だつた。塗料がはげていた。手あかだらけだつた。多くの人が押した。軽く開いた。ギイギイなつた。狭い玄関だつた。一歩で部屋に入れた。玄関と部屋は同じ高さだつた。気軽に入れた。暖かみがあつた。

扉は新しくなつた。白い扉に変つた。少し堅くなつた。開けにくくなつた。階段が出来た。上るのが、めんどりになつた。つめたい感じになつた。落つかなくなつた。いらだたしくなつた。

扉を押した。外に飛び出していた。扉は、入口にも、出口にもなつた。

その後、いろんな扉を押してみた。どれも同じような扉だつた。押すことに疲れてしまつた。扉を開けるのを、あきらめた。

でも、心の中に、手あかのついた、古い扉が、あいたり、しまつたりしている。

あの扉は、いま、どんな扉に変わっただろう。
重々しく、威厳があつて、近より難いのでは。

その扉を、押すのは、いつの日だろう。
扉を押さなくなつて、もう五年になる。

終

集会ごとに

伊規須 泰子

はじめて教会に足をふみ入れた日、

それは、

二十何年か前の五月の早天祈禱会

木々の緑が美しく、朝はさわやかだつた。

石段を登つて、そつと扉を押した。

戸がギーツときしんだ音をたてた時、

心は、

神の臨在に近づけるのだろうかというおそれと、

ここで、

果して魂がみたされるだろうかという不安、

しかしまた

なにがなんでも求めねばという気持と、

いろいろ混つた気持でふるえていた。

はじめて教会に足をふみ入れた日、

兄と二人だつた。

その一足から、

私の新しい人生ははじまつた。

手さぐり、足さぐりの日々だつたが、

少しづつ心がみたまされていつた。

そうして、

新しい生活が、世界が開かれていつた。

それ故に

古い会堂の、あの暖味がたつかしい。

古いけれども、皆の真心でみがかれた床があつて。

その床に、

一大一人の信仰の足跡がしみ込んでいた。

講卓の上には、

長い年月の教会歴史、世の変遷が何巻ものファイル

ムとなつて巻きとられている。

そこできいた聖言が今、心でおどりつづけてい

る。

そこで受けた聖霊が生きる希望を与えた。

そこで祈つた。

そこで祈つた祈りが、感謝、讚美となつている。

そこで学んだ子供たちが今歩いている。

古い会堂は

信仰の歩みと、想い出をいつばい残して、消えた。

そして、

同じ信仰の土台の上に新しい会堂が生れた。

それは、もちろん神の恵みと、

みんなの祈り、真心、奉仕による、すばらしいも

の、

今

座り心地のよい、新しい会堂のベンチに座りなが

ら。

かつての会堂が、祈りが、生活があるから、

今の感謝があるのだと、

集會ごとにしみじみと

ほめたたえる。

終

正 野 与 志 尾

一、菜種咲き、妻の居眠り、誘いけり

○ 古き会堂を

一、手ずれせる、この壁この床、みたま聖霊満ち

○ 新しき会堂に

一、春天に十字架輝き、今日の式

一、岩の上に、建てし幕屋や、春の風

一、はらからの、讚美の声満つ、礼拝堂

○ 折にふれて

一、松ノ内、だけでもと妻の、かくし紅

一、身を病めば、心もしたかふ、夜の秋

一、余生とは、従ふ事なり、石落の花

一、身ほとりに、孫このぬくもりや、日向ぼつこ

一、着ぶくれて、妻ころころと、出でゆけり

一、着ぶくれて、気弱を令と、なりにけり

一、旅心、誘ふ絵図あり、さくら風

一、妻病めば、あきらめにけり、花の旅

一、花一輪、そえて埋むる、供養針

新旧会堂によせて

岩井 美美子

「たといあなたがあつても

緋のようであつても

雪のように白くなるのだ

紅のように赤くても

羊の毛のようになるのだ」

イザヤ書のみ言どおりわたしの罪をことごとく洗いきよめて下さつた旧会堂はわたしの為にイエス様が、わたしに与えて下さいました、イエス様のお体でした。

昭和三十七年秋、姉の手をもつてイエス様の方から戸を開いて下さつて以来十二年、にぶい私を憐んでそのかこいの中に入れてお離しになりました。

壁を白く塗り替えられた時、私はそこに、小羊のようにしみも傷もないイエス様のお姿を拝見したのを覚えております。まことにその中で主は礼拝の度に傷ついたわたしの心をいやし、又罪によごれたわたしの旧足を洗つて下さいました。八月二十四日、わたしの旧会堂最後のお掃除にあたりました時、思はず心をこめ

て十二年間の感謝をイエス様のみ体にふれるようにその厚い床板を拭かしていただきました。

そして昭和五十年三月二十一日、新しくよみがえつた新会堂はヘブル人十二章にありますように、「生ける神の都、無数の天使の祝会」の上に光りかがやくイエス様のみ姿でした。

そしてそこで主は、「聖なる装いをして主を拝め」と私にみ言を与えて下さり、主人にはかたで礼服を与えて下さつて榎本先生の法を越えての御招待に預らしていただいたのでした。

「栄光がとこしえに神にあるように

ア、メン」

とわたしのうちに深い御愛をそいで下さいました主は新会堂と共にまた私を生かし導いて下さることを信じ今はただ主の恵みといつくしみによりすがつて感謝の日々を送らしていただいております。

先生はじめ皆様のお祈りを心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

又わたしの今日あることを望んで旧会堂を献げて下さいました河本のおじいちやま、そして新会堂建立の

為に献げて下さいました丸山様はじめ皆様我心よりお
礼申し上げます。

終

神 の 愛

岡 嶋 美代子

新しい教会ができた。実に堂々たるもので、その建築様式たるや遠い中世の時代を想わせる。

きずその広さにおどろき、工夫された天井の様式、奥ゆきの深い祭壇、かつちりとした腰掛、何一つとりあげても祈りのこめられたものばかりである。

これが先生の長い間の夢であり、私たち信者の願いであつたかもしれない。神を信じ神に願うところ必ず成就する、全くその通りである。

数年前からの計画と、目に見えない小さな献金、そして古きものを取りこわし、新しいものをつくる大きな奉仕作業、一本の釘をうつにも祈りをこめての業々々、否それにもまして日夜祈りつづけられた先生御夫妻のお心のうちを想うと目がしらがあつくなる。

先生は科学者であつたがそれを一切放棄されて神に仕える牧師とられた。そして多くの迷う小羊の牧者となつて、天国への道をぐんぐんと歩いて来られた。否今後とてもその歩みはつづけられると思う。

私は今度はじめて前田教会員の多いのにおどろいた。

先生が育てて下さつた一〇〇余名の信者の方々、だれもかれも先生を中心に神様をみあげ、神と共に歩いて居られると思う。そしてどんなに心の騒ぐときでも必ずになつて神様のみ名をよびつつ、自分の命を大切にしていると思う。

「汝等心をさわがすな、神を信じ、

われを信ぜよ」

こう書いている私は七〇才、あと一〇年で八〇才、しかし、生活年齢は高くても、人ごとの様で私はまだまだ甘えたい気持ちで一杯だ。

「汝みどりこの如くならずば、天国に

入るを得ず」

私はいつまでも神様に甘え神様をおしたいするつもりだ。たとえ愛のむちをうけようと、私はそれをうけとめ素直に日々新に歩んで行こう。この教会のある限り……。

終

われらの会堂

小 羊 生

「今より後もわたしは主である。わが手から救い出さうる者はない。わたしが行えば、誰がこれを止めることができよう。」

(イザヤ四三・一三)

二十数年の間我らの会堂として礼拝や各集会のたびに霊の糧を頂き、常に主に近づいて恵みを受けて来た会堂が、八月十五日の礼拝を最後に十六日から愈々解体される事になつた時、その作業の中に加えて頂いたが、実感として自分の家を解く様を淋しい気持ちしてならなかつた。然し神様が、既に牧師館を完成し給うて又次に会堂をも新しくして我らのために与えて下さると言う事であるから、古きは去りて新しくなされること故、大いなる希望と感謝である事に違いないのである。

神様は、丸山さんの心を感動させて遠い大阪の地から九州八幡まで遣わし給うたのは、旧約聖書エズラ一〇一四にあるように、エルサレムを復興しイスラ

エルを恵むために主がベルシヤ王クロスの心に感動を
与えて人々を遣わし又予言者や祭司エズラ、ネヘミヤ
等を用いて再興されたように、正に聖書的であり神様
らしいみわざで初められた事である。之は主が行い給
う事であり誰も止めることも妨げる事もできぬ貴い大
いなる主の行であつた。

消そうとしても消されぬ色々な懐しい思い出は限り
ないが、いつ迄も古い過去にばかり目を向けてはなら
ない。過去の恵みについて主に感謝する事は大切だが、
惜しむ心で後をふりむくなら塩の柱になつたロトの妻
と同じであるから、潔く前に向つて進む事こそ主に従
う者の道であり、主も又それを喜んで下さる事だと教
えられてきたのである。

さて、会堂が解体されたら出来上るまでは一体何処
で集会は開かれるのかと心配していると、神様が主の
山に備えありて教会に最も近い所に理容会館の二階を
備えて下さつたのは感謝であつた。借家の会堂の不便
さはあつたが充分に礼拝にあづかり恵みを頂いた。

毎月の各例会を初め、伝道会、祈禱会、木曜会、禱
告会は新しい牧師館の応接室を開放されて次々と普段

と交らずに恵まれてきた。

附け加えると、今年の新年聖会も例年と少しも交ら
ずに理容会館二階で三日間の集会で恵まれることが出
来た。

九月三十日に新会堂の定礎式が行われてから建設作
業は日に日に進められて来たが、実に主のみわざが着
々と進められ、経費の面も資材の事も人材のことも、
あらゆる事に於て主が行い主が建てて下さつて何一つ
欠けるものがないようにして下さつた。信者の皆さん
が老いも若きも男子も女子も心から作業の一端に加え
られた事である。何一つ主のみわざでない物はなかつた。
勿論、榎本先生が常に主に従い篤い祈りをもつて日夜
願つて来られた事で、偉大なる主のみ手のわざと力が
働いて下さつたから、誰も何物も妨げる事はできなかつたのである。最も強く感じたことは理容会館を借り
る契約が、毎月更新されて借りて来たけれど、不思議
にさまざまなく借りられ次々と毎週の礼拝が守れたが、
三月になつてから先方から、「お気の毒ですが今月一
杯で来月からお貸しする事ができなくなりましたので
他に探して下さい。」と言われて来た。

その時を神は前もつてご存知であつたから大工さんその他の手のわざを祝して、会堂は急ピッチで完成されていた。(その事は先方は知る由もなかつたことであらう)

丁度、その矢先の申出なのであつた。そのタイミングの誠にドンピシャリであつた事、実に申し分のない完璧さで工事が行われてきたのである。此処まで言えば簡単のようだがこの間の丸山さんのご苦労とご尽力とは云うを待たないが、主を崇めざるを得ない事である。主はほむべき哉。

「今より後もわたしは主である。……わたしが行えばたれが之を止める事ができよう。」

実にすばらしい会堂が与えられ、三月二十一日の感謝会に招かれた地区の教会の牧師さんも、又その他の来賓も余りの出来上りの美しさと完璧さに目を見張り、口を揃えて感激称讃され祝詞を述べられた。

丸山さんを初め皆さんが主に對する溢れるばかりの感謝を以て心から作られ、実を結んだ我らの新会堂には、角々まで秘められた偉大なる神のみ手のわざとセンスとが満ちている。新しいきれいな心地よいベンチ

が大濠から贈られたが、ゆつたりと腰をかけて集会に出させて頂く時、二十有余年の永きに亘つて親しんだ古き、われらの会堂も今は懐かしく思い出されて、心の暖まるのを覚える。

このようにして具体的に靈肉共満されて余りある今日この頃である。誠にわれらの生涯に忘れられない貴い神様のご恩寵である。

「教会はキリストの体であつてすべてのものを、すべてのもののうちに満している方が、満ちみちているものにほかならない。」

(エペソ一―二三)

「われらの会堂」は常に活けるキリスト神の子なるお方の臨在し給う所で、新しくても古くてもいつまでも永久に変わる事がない。

我らは、大いなる神の贈物である「我らの会堂」を与えて頂いた事を、心から満腔の感謝を捧げ、お従いして進む決意である。

(昭・五十・五・十)

終

牧師館の思い出

榎 本 百合子

主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみは
とこしえに絶えることがない。

詩百三十六一

旧牧師館を与えられて卅年、聖言の様にただ主のい
つくしみと恵みの卅年でした。

昭和十五年十一月八幡へ導かれて参りまして、今の
国鉄八幡駅の所（戦災前）に私共の住居を備えられて、
開拓伝道を始めました。主人は早天前に屋上に昇り、
禱告し、早天が済むと聖書を読み、午後は訪問に、山
へ祈りに行きました。河本さんの店の二階二間を集会
所として提供して下さつて、雨の日も風の日も、早天
祈禱会を始め、各集会に通いました。戦災で焼ける迄
度々の空襲にも拘らず一回も休まず集会を守らせて頂
きました。子供を一人を歩かせ、一人を抱いて、一人
は背負つて集会に励んだ事は、今二人、三人と小さい
子供さんを伴れて集会に出て来られる皆様の苦勞や、

喜びをよくわからせて頂ける基盤となりました。戦災
に遭つた時、主の憐みと恵みにより、一人も傷も無く、
守られて感謝でした。住宅も食糧も無い時でしたので、
私と子供達だけ郷里に食糧疎開致しました。

昭和二十二年一月、疎開先から一時帰つて参りまし
た。会堂、牧師館を建てるのはあと何年先か、見通し
がつきませんでした。当時戦災住宅へ入居する事も困
難な程の住宅難でした。処が会堂と牧師館を与えられ
る事を伺い、驚きと喜びで一杯でした。主は人間の思
いと計画をはるか超えた事を成し給うと主を崇めまし
た。八月末、焼け残つた僅かな物を持つて、木の香も
新しい牧師館へ初めて入らせて頂きました。その大き
な喜びにも増して、主の為し給うみ業を思い、感謝で
一杯でした。周囲に家もなく、広々とした焼跡の一角
でした。家財も少なく部屋が広々と感じました。

焼野原の真ん中に緑色のペンキで色どられた、奇麗な
教会で、電車の中からよく見え、周囲を明るくしまし
た。献堂式は九月才一日曜日で、暑い日でした。集つ
て下さつた皆様も、主の為に給う聖業を感謝し、主を
崇めた事を忘れる事が出来ません。

牧師館は玄関に入ると、左が広い廊下で、二階の教会へ昇る階段がありました。その階段の下に後年に大野兄が下駄箱を造つてくれました。廊下の突き当りの正面は障子二枚で、板張りの二帖の食堂と仕切られて居りました。その奥はタタキの台所で、炊事は下駄履きでした。後年板張りに改造されて、当時を知つて居る人は少く成りました。

廊下の右、(玄関の突当り)がトイレで、教会と兼用で、冬など廊下に二、三人並んで順番を待つ事もありました。廊下の右側にふすまで仕切られた四帖と六帖の畳敷の部屋がありました。六帖の部屋には一間(一・八m)の床の間と同じ広さの押入れがありました。何組かの結婚披露の宴もございました。後になつて床の間にカーテンを張つてベッドルームに改造し、病弱でした私は、よく休んで居りました。茲が私の個室であり、祈りの部屋ともなりました。主は様々な祈りにお答え下さつて、子供達が抱え込んで来た、ずいぶん色々な問題を解決して下さいました。二人の子供を天国へ召し、四人の子供を結婚まで導き育て給いました。

会堂が建てられた当時は今では想像も出来ない程、すべての物資が欠乏して居りました。教会の窓硝子も苦心の末、温室に使用されていた硝子を手に入れ、硝子の大きさに合わせて枠を作りました。その硝子も、教会の窓だけは何んとか手に入りましたが、牧師館まではありませんので、雨戸と障子でした。にわか雨が降ると、何はさておいて、大急ぎで雨戸を入れました。時には間に合わなくて、雨水で障子が濡れて、ペラリと紙が破れ、障子の骨だけになつた事が幾度かありました。何とかして硝子障子に替えたいと祈りました。初めは良く使い食堂、次に六帖の部屋をと、次々に、近くの麻生建具屋さんになので、全部硝子障子になつた時の喜びも、忘れられない楽しい思い出となりました。雨の日も明るく過ごせると主に感謝の日々でした。更に洗面所、水道、ガスを与えられ、会堂を西側へ拡張した時、牧師館も広くして、応接間と主人の書齋が出来ました。泊り客の時には客間ともなりました。子供達が大きくなり、勉強部屋が要る様になり、北側に葺降して、スレート葺、ベニヤ張の六帖を造りました。半分に仕切つて、両方入口を作り、二人の子

つて筆を置きます。

供の夫れ夫れの個室が出来ました。夏は朝早く朝日が当り、夕方は西陽が照りつけ、天火の中の様で、冬は陽が当らず暗く、冷蔵庫の中の様でした。それでも子供達にとつては夢に描いた個室が与えられて、大喜びでした。後々は寝室になつたり、物置になつたりで、最後までほんとによく使われた、便利な部屋でした。教会に和室が与えられた時、その下を大野兄と子供達が手伝つて食堂が広くなり、炊事場も便利になり、立派な風呂場が出来、便利な部屋となりました。又においに悩まされたトイレも水洗化されて、使う度に感謝致しました。

霊の上、肉の上、教え切れない主の恵みに、どんなに感謝しても言葉で尽す事は出来ません。

主はわたしの牧者であつて、わたしには乏しいことがない。
(詩篇 二十三篇一節)

みことばの通りに導いて下さいました。子供達の心の中にも、生涯忘れる事の出来ない、牧師館の思い出と共に、主の御憐れみと恵み、主は今も生きて働き給うことを印せられて居る事と思ひます。満腔の感謝をも

八幡前田教会 会堂・牧師館
落成式及び感謝会の記録

△落成式▽ 一九七五年三月二日一〇時三〇分開式

- (1) 奏 楽 石丸幸子
(2) 讚美歌六七 一同
(3) 聖書(詩篇九六篇)及祈禱 伊規須太郎
(4) 讚美歌一九四 一同
(5) 式 辞 榎本牧師

聖書、詩篇九六篇一〇節をお読みいたします。
「もろもろの国民の中に言え、主は王となられた。
世界は堅く立つて、動かされることはない。主は
公平をもつてもろもろの民をさばかれる、と」

このたび八幡前田教会が皆さん御覧の様に立派
に落成いたしましたして、今日この感謝の時を迎える
ことができましたことを、心から神様の前に感謝
しております。

それは私共の信ずる神様が今も生きてこの宇宙
とその中に満ちるものを支配し、之を治め之を導
いていらつしやるという証として、この会堂を神

様が私共に与えて下さつたと信じ、今日は献堂式
と申しませんで、「落成感謝式」と私共はこの式
を考えております。

私共の住んでいる現実の世界は、人の手によつ
て動かされ、或は人の力によつて変化して行く様
に見えますけれども、実際の変化は神様の許し
がなかつたら何一つできない、人が神様を信じよう
と信じまいと、認めようと認めまいと神様はあく
まで神様でいらつしやる。このことは私共が否定
することのできない事実です。

それはどんなに文化が進歩いたしましても、或
は社会組織がどう変りましても、人間の事情境遇
がどう変りましても、私共が人間である限り千年
前も今も十万年後も人間であることに変りはない、
そこには何も変化がありません。ただチョンマゲ
を結つていたのがハイカラになつただけ、或はハ
ツピを着ていたのが洋服を着ているだけで中味は
少しも変りはございません。そういう私共を統べ
治めていらつしやる。それは時代と共に変る様に
見えますけれども、その奥に神様の支配と導きと

いうものを抜きにしては人間の存在は許されないと
思います。

それで過去が神様によつてこの天と地とその中の
すべてのものが造られ保たれ今日まで参りまし
た様に、現在も私共自身がこうしてここに立つこ
とができるのも、神様の恵みが無かつたら何一つ
できないということであります。私共はいつもそ
のことを感じます。人間が自分で生きることがで
きるのなら、死にたくなかつたらいつまでも生き
ていることができるはずです。しかし死んでしま
います。生きておりたくないと言つても死ねませ
ん。これは私共人間が人間として自分の力でどう
にもならないものがあるということの事実だと思
います。

ただ神様だけが私共人間の命を支配し導いて下
さる。どんなに文化が発達し科学技術が発達いた
しましても、この神様の許し給わないものは何一
つできません。今日も様々の国が、様々の人が自
分の計画により自分の力により何かしようといた
しますけれども、神様の許しなくしては何一つで

きないのが事実でございます。「主は王となられ
た」とあるこの神様が今も地球を支配し宇宙を支
配していらつしやるということを、気が付かない
と言うか、認めようとしません。人間の何かでこ
の世界を変えようとしているけれども、どんな働
きもみな空しく潰えてしまうことは歴史が物語つ
ている通りです。

私も長い間この神様を知りませんでした。ただ
自分の力と自分の知恵、何かによつて行けるもの
の様に考えていました。しかし今から四十数年前
はじめて真の神様がいらつしやつてその神様がす
べてのものを支配していらつしやる、それも昔の
物語でない、切れば血の滴る現実の中で今も神様
は生きて働いていらつしやるんだということをお教
えられました。聖書を通して神様は公平なお方で
あるということをお教えられました。それから今日
まで四十数年の間この神様の御支配に従い、それ
までは人間の考えに従い或は人の支配に従つて参
りましたが、その時以来神様の御支配に従うこと
だけを努めて参りました。

そのために色々なこの地上での戦いや困難の中を通りましたけれども、そのつどそのつど真心をもつて寄り頼む者を真実をもつて支えて下さる神様が今も生きていらつしやるんだということをもつて教えられて参りました。

この会堂も私共の計画ではありませんで、神様の導きで新しく会堂を与えられました、私共の計画だつたらまだまだこの会堂は建たなかつたかも知りません。神様が今もすべての人の心を導き又すべてのものを支配し今も導いていらつしやる、この神様の御支配に委ねて参りますとき、神様は決して私共信頼する者を恥かしめ給わない、その証としてこういう会堂を与えて頂きました。

この会堂が今日こうして落成するに到りました経過につきましてはお手許に善上げてあります資料の中に工事の経過報告が簡単に記してございますが、一年がかりで牧師館と会堂が、しかもそこに書いてございますようにこの世の中の計算ではとてもこんな会堂や牧師館が出来つこなしという様な本当に僅かな金額で、……しかも昨日遠

方から見えたある方から「牧師館、会堂ができたと言うけれどもどういうものか分からない。前の牧師館が天井が低くて暗かつたからそう大した家じゃなからうと思つてそれらしいものを見付けたけれども一向見当らなかつた。来て見かところが余り立派な牧師館だつたからびつくりした」とこういう正直な話を伺つて、私は自分が住んでいるからどんなか分かりませんが、皆さんがはつきりとそう言つて下さる。「もつともつと狭い所でもつともつと粗末な家に住んでいるだろうから、感謝式の前の日に行つたら迷惑するだろう、居所が無くて困るんじやなからうかと来て見たところが幾間も幾間もあつて安心して泊れるからやれやれと思ひました」と言われる、まあそれほど神様の祝福によつて五つのパンと二つの魚をもつて五千人を養ひ飽かしめ給うた神様は、今も真心をもつて信頼し従うものに対して実に恵み豊かな王であります。

王様というのは大抵我が儘で、自分の事しか考へない、これがこの世の王様ですけれども、神様

は実に愛なる王でいらつしやる。それで私共がこの王なる方の御旨に従つて参ります時、この恵み豊かな、力に満ち、知恵に満ちた王なる方が、その力を以て寄り頼み従つて来る民を養い守り支えて下さいます。

王様は法律を作り、そしてそれを執行し、国を守り或は民の秩序を守る、それが王様の責任であります。この王の王である神様は確かに律法を与えなさいました。私共人間の心の中に良心という律法を与え、又それを守る力も与えて下さいました。けれども現実の私共は王様に従わないためにその律法を守ることができなくなつてしまいました。これではいけないと思ひながらもやめることができない、これが正しい道だと分かつていても進むことができない……というのが私共のかつての状態でした。王様の立てた律法に従えなくなつてしまいました、力がありません。けれども真の王である神様はそういう弱い私共を支えて命を与え力を与えて、こういう時代にお正しく王の王なる神様の律法に歩ませて下さるお方でありま

す。

又、神様は、丁度一国の王がその国のすべての経済を支配するように、「地とそれに満ちるものは皆わがものなり」とおつしやる、現実はこの地上のすべての経済機構も何もかも、みな実は神様の手の中にあります。私共がこの王なる方に従つて参ります時、この地上の生活に必要な一切を備えて下さる、イエス様が「……何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思ひわづらい、何を着ようかと自分のからだのことで思ひわづらうな。……さす神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えらるであらう……」と言われました通りで、今日の色々な経済問題の解決の鍵はここにあると思うのです。ところがこの王なる方に従わないで、人間の力で何とかこを突破しなければ打開しなればという訳で、王様に従うよりも自分が王様になつて色々計画を立ててやりますけれども、それは失敗の連続で、今日の歴史が物語つています。

又、王様は裁判権を持つています。人の裁判は感情に委せ利害によつて随分いかげんなものもあります。けれどもこの王の王である神様だけが正しく裁きをなさる「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」とあります、この王なる方は私共のただ外の形、言葉や行為によつて裁くのでなく、その心を見て下さる、これは弱い私共にとつては大きな慰めでございます。何とかして神様に従いたいと願いつつも従えない弱さというものを認め、憐れんで助けて下さる、そのためにイエスキリストを十字架に掛けて私共の罪を贖つて下さつた、御自分で贖つて私共に罪のゆるしを与えて下さるほどに憐れみ豊かな裁判官でいらつしやる。これはこの王に従う者にとつて大きな慰めであり力があります。

又、一國の王は軍隊をもつて國を守ります。この王の王なる方を、聖書は「万軍の主」と呼んでおります。千々万々の御使をもつて私共を守り支えて下さる、現実に今日もこの王なる方が生きて私共のすべてを見そなわし真心をもつて信頼する

者を恥ずかしめ給わない……その事をいやといふほど私共は体験させて頂きました。

今日この席に見えておられる福岡大濠公園教会の藤掛さんは、戦時中この神様に従うが故に色々な目で見られることがあつたそうです。ある時、夜遅く仕事から帰宅する時、うしろから誰かが来るような気がする、自分が立止るとその人も立止る、歩き出すとその人も歩き出す、おかしいなと思いつゝ路地を折れて自分の家に帰つた。それつきりその事を忘れていらつしやつたそうですが、後になつて戦後その人が藤掛さんに「……あの当時、私は右翼の凝固まりであつて、ヤン退治でクリスチヤンを片端からやつつけてやろうと、ある時あなたの仕事から帰る時間をはかり、あなたの後を付けて何とかこの際刺してやろうと思つた。灯火管制で真暗の中、誰も居ないのだから人を刺すのは何でもない、けれどもどうしても刺せなかつた、いくらでも機会はある、隙はあるんだけれども、何かがあつた、どうしても刺すことができなかった……。」と白状したと伺つたんですが、

その様に現実に王なる方は千々万々の使をもつて
信賴する者を守つて下さる方であります。それが
昔の物語りではありません、聖書の中だけの物語
りではありません。今も現実に真心をもつて信賴
する時、神様はその様な力でもつて守つて下さる、
このことを私共が今日この時代に信じさせて頂い
ているということが私共にとつてどんなに大きな
神様の恵みか分からないと思います。

前田教会も今日までこの神様にお従ひして参り
まして、神様がこの立派な会堂を与えて下さいま
した。私共のうち誰一人「私が教会のためにこれ
だけ献金した、だから教会ができた」と思う人は
ありません。この工事が安くあがつたのは皆が喜
びをもつて感謝をもつてこの会堂改築のために従
事して下さいました。以前にあつた家を撤去してその
あとに建てた訳ですが、古い家を崩すということ
は随分ごみを被つて汚ない仕事ですが皆さんが、
「先生何かお伝ひすることはありませんか」と自
分の仕事を休んで、ごみを被つて喜びを以てこの
汚ない作業に従事して下さいました。又、基礎のコン

クリート打ちというのは随分力仕事なんですけれ
ども、主婦の方達までモンペをはいて一生懸命で
やつて下さつた、そして出来たのがこの会堂でご
さいます。成程お金を出せばもつと豪華な会堂を
建てることもできたでしょう、けれどもこの会堂
にはそういうお金の豪華さはありません、が神様
の恵みが隅々隅々に行き届いて、それこそ一人
雇うことなしに皆が恵みに感じ喜びをもつてこの
会堂が今日出来上つたということは、神様がいか
に恵み豊かな方であるか、この度の会堂建設に当
つて私共一人一人が体験しその業に与らせて頂い
て、神様に従う喜びを共に分かち合うことができ
たことを心から感謝しています。

どうか、この会堂は立派になつたけれども中味
は空つぽになつたなどということにならないよう
に私共は今日この所に一つの縁を引いて、ここか
らもう一度新しく王の王なる神様の前に謙虚にお
従ひして行きたいと思ひます。この王なる方が私
共のためにどういふことを備えて下さつてゐるか
今は分かりませんが、けれども必ず素晴らしいものを

王なる方は備えて下さつてゐる。どうか皆さん今日を記念してもう一度ここから新しく、一人子を賜う程に私共を愛して下さいこの愛なる王の御愛に答える日々でありたいと思ひます。

(6) 祈 禱

榎本牧師

主は王となられた、世界は堅く立つて、動かされることはない、主は公平をもつてもろもろの民をさばかれる……あなたか私共の王にましまして、本当にお従いすることの鈍い弱い者でございましたが、あなたの大いなる憐れみをもつて許し、又、いつくしみをもつてはぐくみ導き、今日に至らしめて下さいましたかお恵みを感謝いたします。

どうかこの会堂があなたの祝福に満ち、臨在の雲をもつて常に覆い、この所であなにか御自身との深い交わりの中に居らしめ、又この所であなにかの御声を聞き、又あなたの民である私共がすべての悩みと重荷とを解き下し、あなたの手によつて涙を拭われて、この地上にあつてあなたの証し人と

して、それぞれの家庭において職場において、又この地上にある限りあなた御自身の栄光の器となしてあなた御自身がおん用い下さいますことをこゝ願ひ奉ります。

又、あなたの御前に恵みに感じて愛の勞をとつて下さつた方々の上に、この時覚えてあなたを上より豊かに恵みを満たし給わんことをこゝねがい奉ります。

又、遠方にあつてこの業のために、朝に夕に祈りをもつて支えて下さつた聖徒方の上に、上より豊かなおん恵みを満たし給わんことをこゝねがい奉ります。

又、北九州の地に、九州の地にある、あなたの御名によつて立てられた各教会の上に、豊かな祝福を満ちしめ、常にあなたが王として崇められ、又恵み豊かな王に従う多くの魂を起こして、主よどうかこの国があなたの御前に喜ばれる国となりますように、主よどうか豊かな恵みを満たし給わんことをこゝねがい奉ります。

又、今御前にある一同をあなたのみたまに満た

し、あなたからの喜びと命と力に満たされ、主よ
どうかお従いして歩み行くことができますように、
助け導き給わんことをこいねがい奉ります。
尊い主の御名によつて感謝してこいねがい奉り
ます。
アーメン。

(7) 讚美歌 明治版九八

一同

(8) 備品贈呈

福岡大濠公園教会

(代表 藤掛邦夫)

レザー張りベンチ 五〇脚

聖書台 三個

聖餐卓子 三個

(9) 感謝状贈呈

基督伝道隊八幡前田教会、会堂・牧師館の建築
に対し丸山(草崎)工務店は長年に互る経験と磨
かれた高度の技術を駆使し全力を挙げて誠心誠意
施工に当られ今日こゝに見事に完成されたことは
誠に感謝に堪えません。本日落成式に当り記念の
品を贈り感謝の微意を表わします。

(10) 感謝の辞 高木敏夫

教会員一同を代表しまして高い所からござい
ますけど感謝の言葉を述べさせて頂きます。

今私共教会員一同は大きな大きな喜びと感謝に
包まれております。それは

才一に、神様に対する感謝と讚美でございます。
「私の心はうるわしい言葉であふれる」とありま
すが私共はこの素晴らしい会堂が出来上つたことを
神様に心から感謝申し上げます。

才二番目は、唯今の式辞にありました通り、誠
心誠意ほんとうに寝食を忘れてこの牧師館と会堂
の為に打込んで下さつた草崎さん、田野さん、丸
山さん、秋夫君その他の関係の方々に対し私共は
心から感謝を献げたいのであります。

才三番目は私共自身の喜びでございます。この
牧師館・会堂の為に長年祈つて参りました。その
祈りに答えて神様は予想以上に素晴らしい会堂を与
えて下さいました。この喜びは言い尽くすことが
できません。今度の礼拝からこの新会堂で神様を
崇めることができると思つて私共一同嬉しくてた

まりません。今までもそうでありましたが更に大きな大きな讚美と感謝を神様に献げたく願っております。私共の心は大きな喜びに満たされております。

その国の道德の水準はその国の建築を見れば分かると思います、あるいは文は人なりとあります。が、私は建築は人なりと申し上げたいと思います。その建築を見ればそれを作つた人の人柄が分かります。

私はこの出来上つた会堂を一人で上げ上げと眺めます。本当に隅々まで神経が行届いています。私共の予想した以上に素晴しく素晴しく出来ております。私はこれを通して草崎さん、丸山さんその他の方々が本当に隅々端々に至るまで神経を注いで下さつたことを見ます、釘の一本、板の一枚に至るまで真心こめて作つて下さいました。私も共に手伝いをさせて頂いて、そのことをつぶさに見て参りました、ほんとに感謝に堪へません。

昨年の四月に神様は御自身の御心をなさんとして大阪にいらつしやる丸山さんを引き出し給いま

した、そして今日まで約一年間、本当に寝食を忘れました、この建築の為に丸山さんは食事の時間も絶えずその事が頭にありました、寝ている間も私共がぐつすり休んでいる時も、その事が念頭から離れませんでした。如何に素晴らしい会堂を神様を崇める会堂を作るかということが全部を占めておりました。その願いに答えてこの様な会堂を与えて下さいましたことを本当に心から喜ぶ次第でございます。

又、この工事を終りまして草崎さんと田野さんが引揚げたあとに、牧師夫人が申されておりました「長い間一緒に御飯を食べた草崎さんと田野さんが帰られて、本当に身内の人が居なくなつたよ、うな淋しさを覚えます」と。これは牧師夫人ばかりではありませんで私共一同もそうであります。又、帰るに当り草崎さん田野さんは一番上等の皮表紙の聖書を注文して買われました、それが縁となつて聖書を読むようになられたのです。

私共はこれを機会にお二人が気安く牧師館・会堂にお越し下さることを切に願います、共に神様

を讚美したいと切に思います。

まだ感謝の言葉は本当に尽きることがございませんけど、今日はこれをもちまして感謝の言葉とさせて頂きます。どうも有難うございました。

○ 頌栄五四一 一同

○ 祝 禱 榎本牧師

△感謝会▽

司会 安東篤良
奏楽 伊規須泰子

○ 讚美歌一九四 一同

○ " 四〇二

○ 食前の感謝祈禱 正野真宏

(食事)

○ 独唱(讚美歌二篇より……主けその群を……)

西山 修

○ 祝 詞

日本基督教団門司大里教会牧師

山本繁夫先生

榎本先生おめでとうございました、教会員の皆様おめでとうございました。こんを素晴らしい教会が出来ている事をはじめて見せて頂きまして心から喜んでおります。

私はここに来るまでは普通一般に建てられておる鉄筋コンクリートのまあ二階建てか三階建ての教会だろうと想像して参りました、ところが……私は前の教会堂を知っている訳ですが……前の教会堂を???した様な会堂で、これはいいなあと感心しております。

私は三年前に私共の教会を建てたのですが、その後、中学生が感想文を書きまして、それを読みましたところ「前の教会は床からも神様の臨在があつた、しかし今度の新しい教会は非常に冷たくて神様の臨在が遠い……」というようなことが書いてあり、私はびつくり致しましてなるほどそんな違いがあるかなと思つて自ら反省させられたのですが、この教会に來ましてこの建て方自体がですね、もう一般の鉄筋の持つておるあの冷たさがございませんし、まことに日本的で素晴らしいと

思うのです。講壇の所を見ましても日本のお座敷をそのまま持つて来た様なそういう形でありまして、非常に落着きがありますし、ああここなら本当にじっくり祈れるなあといいそういう感じがいたしました。

で、これはやはり榎本先生の信仰から出た建物だと思いますが、前の教会のそのままの形をそのまま継続して行ける、そういう教会だということでは非常に羨ましく感じております。

そして一つ一つの建物が、先にも報告の中に取りましたように、もう本当に丁寧に私もじっくりしております。こんな建築屋というのは今はございませんね。本当に素晴らしい建物が出来上つたことを心からお祝い申し上げたいと思います。

それともう一つびっくりしております事は、費用の少ないということですね、こんな教会が……まあ私はあまり見ていない訳ですけれども……一千万円ぐらいでここが出来たという様なことは考えられませんね、恐らく三千万円ぐらいかかったのではないかと思つてゐる訳です。

自分の教会を考えて見たり、或は福岡あたりに渡辺通教会なんか一億二千万円をかけて作つておりますけれども、金はなんぼかかつても出来上つたものが粗末だというのが随分あちこちある訳です。

けれどもここはその費用が少なかかつてゐることにびっくり致しました。しかし報告の中に出て来ますように、皆さん方がほこりをかぶりながら労働しながら作り上げられた教会だということを知りて成程なあそういう事にした故にこういう費用で済んだのだということがはじめて分かつた訳です。

私は教会堂が立派になることをあまり喜んで居らない訳ですけれども、しかし教会が立派になることと比例して教会形成が作り上げられて行くことに意味がある訳です。ところが私共の教会なんかは教会が立派になつたそれで皆が安心してしまつてそれからもうあまり協力せんといつたそういう形が出来易い訳です。

しかし御教会は、そういう一人一人の祈りと労

働として献身・献金そういうものがこう積み重ねられてこういう会堂が出来かと言うならば、これはそれそのものが既に教会形成でよし、又これから同じ様な形で進んで行くことが考えられますので、私はこの教会の前途は非常に洋々たるものがあるところ思つて心から羨ましいほど感じながら、お祝いの言葉を……粗末でありましたけれども……申し上げて終らせて頂きます。

おめでとうございましたか。

日本バプテスト連盟八幡教会牧師

大沼 上先生

おめでとうございます。今年の一月何日頃でしたか、靖国神社の国営化反対の講演会をするので募金をしておりまして、この町の教会を片端からお願ひして歩いたことがあります。

私も自動車に乗せて頂いて、八幡の西の方は私がよく知つているからという事で、榎本先生の所へ行きましようあそこはすぐ分かりますと来たのです。私に「神は愛である」という電灯が中

点る看板があるのを知つておりましたから、「神は愛である」を探して歩けばすぐに来られる、そう思ひまして来たんですがそれが無くなつておりました、やあこれはどうもこの頃は蒸発騒ぎがよく起るし、榎本先生が「神は愛である」を引込めちやつたらこれは大変な事だと思つて、この辺をうろろろして探したら工事をしております、前の玄関のモルタルを塗つておりました、工事の方から親切に牧師館はあちらの方ですと教えて頂いたので榎本先生の方にお尋ねできた訳です。

そんな訳で、「神は愛である」が無くなつたのを見た時は、どうなるのやらと思つていましたけれど、この様に立派に復活をさつて、イエス様よりも一寸早く復活をさつて、大変びつくりしておりますと共に心から喜んでおります。

で、前の方が狭いものですから中も狭いだろぐぐらいに思つていましたら……私、はじめて参りましたんですが……えらい広くてびつくりしております。それから何かこの水族館の様なものがありました、それに時計も説教者の真前にあります

て説教が長からず短かからず規制される様になつてゐるのもこれは大変面白い事だと思ひます。

それからこれは笑ひ事であつた一つ非常に感心させられましたのは屏風ですね、一体これがどなたのか全然分かりませんけれども、元祿太平記のタイトル画に出て来る様を非常に奥床しいものであります。

この新しい会堂の中に古くてしつかりした信仰が宿つてゐる象徴だろうと私は思ふ訳であります、この新しい会堂の中でその様をしつかりした信仰が益々生い育つて、その働きが広がつて行きますよう、心からお祝い申し上げたいと思ひます。尚、私は年金病院のすぐ前の教会でありますから、不幸にして入院される様な事がありました時には……あそこは順番をとるのに非常に時間がかかりますが、そういう御用には割合お役に立てると思ひますから、どうぞお気軽に申し付けて頂きますと、番をとるのをいたします。

折尾女子商業高等学校宗教部長

群山 先生

こちらの教会にも私達の学校から日曜日ごとに生徒がいつもお世話になつておりますし、昨年だけは会堂工事の爲、生徒は暫く待つておつてくれという事でございましたけれども、この様な素晴らしい会堂が出来まして、多分今度からの生徒達はこの教会に参りました時にも、この教会を大事にし、この教会で学ぶことができると思ひますと、私もここにやつてゐる生徒の将来が祝福されてなりません。

又、ここに参りまして、私達の学校を卒業した生徒達がこの教会員となつて、かいがいしく働いてゐる姿を見ますと、榎本先生が私達の学園とどんなに深い繋がりが有り、そしてその先生のもと、この様な素晴らしい建物の中、日本的な落ち着いた情緒の中で、信仰が身についたものとなるかと思ふと嬉しくてなりません。

今後の生徒達の上にも、又教会の発展の上にも心から祝福と発展を祈りたいと思ひます。

何分にも突然の事でふつつかな御挨拶しかできませんけれども、教会の発展を祈りつつ終らせて頂きたいと思えます。

西南女学院中学校長

水田政義先生

西南女学院を代表いかしまして、本日の会堂並びに牧師館の落成に心からお祝いを申し上げますと存じます。

折尾女子学園同様、聖日ごとに私達の学校の学生・生徒が、多数礼拝に参加し御指導を受けておりますこと、かねがね非常に有難く感謝を致しております。

更に榎本先生には前々から西南女学院がお世話になつております。戦時中、教師が動員され非常に学校が困つておつたとき、当時の原院長が榎本先生に援助してくれないかということをお願いになつたそりです。

先生は理科の資格をお持ちでございましたけれども、自分は牧師として宗教の方のお助けなら

いうことで、たしか昭和一六年からでしょうが戦後まで数年ですれ、女学院が非常に困つております時に、そして又、宗教行事が非常に困難な時に先生は私達の学院をお助け下さつた訳でございます。

更にその後におきましても、私共は春と秋に短大・高・中それぞれ特別な伝道集会をもつておりますけれども、そのとき先生は特に高等学校・中学校の方の講師を願つております。

それから中学校と致しましては、この一三日だつたと思ひますが、卒業生の為の特別礼拝を催しております。これは高等学校・短大ともそうなんですけれども、今年は特に榎本先生を煩らわせまして、卒業生にお話しをして頂きまして、非常に感銘深いお話しをして頂きまして、私共心から感謝をしておる次でございませう。この事につきまして先生をはじめ教会員の皆様に厚くお礼を申し上げます。

私は六年前こちらに参りまして、現在中学校の生徒が六四〇名おります、日曜日に最寄りの教会

にそれぞれ参りました、教会学校並びに礼拝に参加をしておりますんですが、私は生徒達が中・高六年間お世話になりますので、まあ志を立てまして、それぞれの教会をお尋ねしお礼を申し上げ、又連絡する、そういう機会を持つて参りました。

大体一わたり終りまして、今二回目で一〇くらいの教会を廻つてゐる訳なんですけれども、たしかこの教会には一昨年になるのではないかと思ひます。私四四年に参つた当時、特伝のあと決心者の連絡で、実は一度牧師館をお尋ねし、榎本先生にもお会いする機会をと思つたのですが御不在でございました。そういうことで牧師館に参つた訳ですけれども、正直に申しましてこの牧師さんは本当にお気の毒だなと思つたですね、前の牧師館の周囲を見ましてそう思いました。

その後、牧師館に榎本先生をお尋ねしたり、教会学校の別館の方へ参つたり、又礼拝にも参加した訳ですけれども、私はその時礼拝に参加して受けました印象は、本当に聖霊が豊かに働いておられる礼拝であるということですね、その事を非常

に感じました。私、今度こうした会堂並びに牧師館：：実はまだ私は参つておりませんけれども、がこの様に立派に落成したこと、それは神様の聖霊の御導きと教會員皆さんの信仰の贈物であるということですね、ここに神様の御業が現れている事を思つて、神様を讃美したいとこういう風に思ひ参つてございます。

私は全国の教会を大分あちこち廻りました、丁度昭和二年に信仰に入つてあちこちを、校長としても八ヶ所くらい場所を変つていますので、色々な教会堂を知つております。当地に参りましても？？くらいの教会を尋ねて見まして、会堂がおよそ分かる訳です。ここに参りまして、この会堂の特色、他と比較して非常に良く出来てゐるといふ点に分かるんです。

御参考までに申しますと、先ず天井が非常に特色のある天井だと思ひます。平面でなくこういう風に屈折を持つてゐるといふことですね、そして先ず天井が余り高くないといふことですね、これは冬の暖房の為に非常に良いことではないかと

思うんです。

実は私は福嶋に一六年おりました、西南学院教会という教会ですが、昭和三〇年に会堂を建てたんです、非常に天井が高く冬に暖房に非常に困っています。まあ最近その処置をした訳ですけれども、天井は余り高くない方がよいという考案を持つておりました。そういう点が一つの特長であると思います。

それから講壇ですけれども、これも非常に特色があると思うんです。講壇が余り空間を広くとつてないということですね、集中的に作られていると思います。従つてその左右に祈禱室と事務室が相当広く作られております。普通ですと講壇が非常に広い、広ければ広いなりにクリスマスその他行事には利用ができる訳ですけれども、その隣の空間が非常に狭くなりますね、そういう意味ではこれは非常によくお考えになつてゐるのではないかと思います。

それからこの会堂の広さとして非常に収容能力が大きいと思うんですね、私、今一寸数えました

らベンチ（二脚続きを一連として）二一くらいですから五人坐られたとしてここに約百名、六人坐られたらもつと多くなりますね、しかしこれくらいの空間でそれくらい収容できるといふことは、椅子なんかの構造にもよりますけれども、非常に工夫してあると思うんです。

更に母子室ですね、これが非常に広く作つてある、これはやはりお子様連れで、家族で礼拝に御参加なさる方に母子室が非常に広く作つてあるということ、これも非常に長所だと思ひます。

更に予備室ですね、それからホール、こういう所もずつと開け放すと、出席者の多い時にこれらが全部会堂に利用できる訳ですね、まあこういう面も非常に良く工夫してある様になります。

色々この建築の事につきまして、建築に当られた方、又教会員の方々が本当に献身的に御協力になつて、こういう立派な会堂が出来ましたことを心からお祝い致します。

尚、私達の学院生徒が今後もお世話になりますので、その点の御指導をもよろしくお願いいたします

ます。

おめでとうございました。

榎本孝吉氏

私は唯今ご紹介を頂きました榎本牧師のしがな
い兄でございます。愛知県から参加させて頂きま
した。

私の家は代々仏教信者でございまして、母は非
常な仏教者でございます。その息子の弟がこの道
に入つたことを非常に嘆きまして、一日私に、ど
うか心を改めてもらいたいと聞かしてこいとい
うことで、はるばる……当時福岡の折滝先生の家に
おつたので……お話しに参つたことございま
す。ところが会つて見ますと、もう彼はこの信仰
に夢中になつて私の言うことは少しも聞きませ
んでした。それで帰つて母に申しましたら、母もそ
の後にはあきらめた様でございます。

それから既に四〇年、多くの歴史を繰返しなが
ら今日に至つたのでございます。そして今日この
様な立派な会堂並びに牧師館が恵まれたことは、

私まことに感概無量で本日参加させて頂きました。
そしてこの喜びを亡き母と共に喜ばせて頂くうと
思ひまして、密かに遺影を携えて列席させて頂き
ました。

この事はとりもなおさず河本様ご先代からご一
家挙げての御支援ならびにここにお見えの皆様方、
ひいては全国津々浦々の信者の方々の贈物である
と堅く信ずるのでございます。

唯今式辞にもありました様にこの立派な会堂建
物が出来たのを機会と致しまして、益々この道に
御精進あらんことを切にお願ひ申し上げまして感
謝と祝辞を申し上げたいと思つた次才でございま
す。

失礼いたしました。

福岡大濠公園教会 所司恵正氏

この感謝の式典に大濠公園教会を代表しまして
御挨拶を申し上げることを誠に光栄に存じており
ます。

本当に立派な教会が出来まして、榎本先生はも

とよりのこと皆様方は感謝で一杯だろうと思いません。私共、榎本先生のお導きを受けております大森公園教会の一同も心から嬉しく思っております。拝見しますると、一つ一つが悉く神の栄光であり、聖書に「かくて神の栄光が表われた。」とある通りであります。

皆縁御承知の様に榎本先生の学歴によれば、この世的には本當に成功の道があつたでしよう、それをパウロが捨てましたように蕪土の如くかなくり捨てて、そして神様の救の道に努められましたか、地道な道を孜々として歩いて来られましたか、神様に従つて聖書一本で今まで歩いて来られましたか。

この仕事に当られた丸山さんが大阪にいらつしやるんですが、榎本先生はこの丸山さんお一人の為にわざわざ大阪まで出向いて集会をせられた、ということを私承りまして、これが本當の伝道者牧師の態度だところ思つて本當に神様を崇めた次才であります。

かつて大阪フリーメソジストの河辺牧師も、アメリカから帰られて、蓑笠を着てわらじを履いて

淡路の島々を巡られたと言いますが、ただ一人の羊の為にわざわざ出向いていらつしやる、この態度は本當に神様が喜びなされる、そういう係りでこの度には丸山さんに神様の人命が下つて、神様が丸山さんを動かしたこの会堂の建設に当らせられた。こうして見ますると、一つ一つが祈りを込めて作られておる、どこを見ましても神様の栄光だ、こういうふうに感じられる訳であります。

立派な教会が出来ましたが、榎本先生はこの忙しい中から大森公園教会を兼牧せられて、一週間に何回となく大森公園に出向かれて孜々として地道な道を歩いておられます。立派な教会が出来ましたけれども今後も恐らく榎本先生は神様にお従いなされて地道な道をまた進まれることだろうと思ひます。神は更に又それを祝して、段々と神の栄光を表わしなされることと思ひます。この教会において今後も罪人が救われ潔められ、或は病者がいやされて益々神の栄光が表われることと存じます。又そのことを心からお祈りする次才であります。

これに当られ、祈られた八幡教会のお一人一人、これに当られた一人一人が今まで祈りを込めて一つ一つをやられたことと存じます、どうかこの教会に今後も多くの人が救われて、神の栄光がいよいよ表われますように。

一人の罪人が救われそしてこの神様に捕えられ神様の道を歩きますと、三〇年四〇年のうちにこの様を栄光が表われるんだということを証ししておると思います。

榎本先生が一人、一切合切を捨て、学歴を捨て地位も名譽も悉く捨てて、そして神様にお従いなさつた、そして地道な道を三〇年四〇年と歩いて来られた、その結果生れた神の栄光であると思えます。

どうかこの教会を神様が益々祝福されて、ここで更に多くの罪人が救われ、更に深められ神の栄光が表われますことをお祈りしましてお祝いの言葉といたします。

○ 思出・感想等

城 正俊氏

今、御紹介に与かりました城でございます。思えば五〇年前でございませう。私が八幡の高見町に居りました頃に、伝道隊から折滝先生に月に一回来て頂きまして家庭集會を開いておりました。まあそれが段々ふえまして、当時榎本先生は明専の学生でございまして誰かの紹介で来られた様でございますが、その後専門の応用化学を離れて、こういふ人の魂の救の方に邁進されまして、唯今こういふ風な神の恵みの豊かな導きによりまして、こういふ會堂が出来たということは誠に喜ばしいことと思えます。

私も唯今博多に居りますが、落成式に招かれました今日はじめにこういふ立派な會堂が出来たことを見せて頂き、誠に喜ばしく存じております。この會堂においていよいよ救靈の爲に邁進されんことをお祈りいたしまして祝辭といたします。

河本かつ

城さんの家庭集會に参りまして、私共夫婦が神様の救に与かりまして、城さんはここに教會が欲しいとずつと祈つとつて下さいました。その果が実りまして……主人もぜひここに教會が欲しいと願つておりました。

神様は良き願を聞いて下さると確信を持つておりました……年をとつてから教會が近い所がよいと願つておりましたが、中々土地がございませんでした、戦災に遭いましたおかげですつと回りが広くなりましてこの土地が与えられました。終戦直後でございましてからマツチ箱みかいな小さい教會でございまして建てられました、まあ始めは信者の方も少のうございまして、段々こうして成長いたしました、多くの方がお救われになりました、教會が狭くてはみ出る様になり、又古くなりました。

この度こうして皆さんのお祈りに支えられまして、立派な會堂を与えて頂きまして、本当に私は涙が出るほど感謝しております。教會が端から小

さくなるなら淋しいですけれど、こうしてみんな榮えて行くのは何と有難いこととございまして、有難くて涙が出る様でございます。

またここから神様に祈らせて頂いて、更に多くの魂がお救われになつて、この時代にどうしてもこのキリスト以外に救はないと悟つて頂きたいと願つて、私共更に恵まれて一歩々々伝道の為に……私共何もできませんけど、その願をもつて一日一日を過ごさせて頂きたいと願つておるものでございます、どうぞどなた様も更にお祈り下さいますようお願いいたします。
今日はありがとうございます。

加藤千代（大阪府高石市）

皆様お久し振りでございます、加藤千代と申します。ご存知の方も居られると思ひますが……今日は大濠公園教會の方もここに加わられまして、本当に素晴らしい落成式にお招き頂きましたことを感謝いたしております。

今、ご紹介下さいました様に、昭和三〇年四月

一日に榎本先生に洗礼を授けて頂きました。本当に悩みの中に居りました者でございますけど主の愛を知りまして、それと一緒に主の愛そのものの、榎本先生の本当に親にも優る御愛のお導きを頂きました。この教会に六年間居らせて頂きました。

その間に、信仰がすっかり落ちておりました主人も信仰が復活しましたし、主人の父も母も、とりわけ父は先生に最後のに全くその魂に確信を与えて頂きました。本当に喜んで召されました。

私の子供達もみな日曜学校でお世話になりましたし、この教会に居りました六年間というもの「神は愛なり」と神様の御愛とはこんなに素晴しいものであるかというのを、榎本先生から榎本先生を通して教えて頂きました。勿論聖書のみことばかりでございますけど……。

その六年の間に先生から「愛に根ざし愛を基とする信仰」主に愛せられ主を愛するその信仰の利益のあるものであるということをお教え頂きました。そしてその中で育てられて（堺に）遣わされたものでございます。

ここから離れます時は、先ずオ一に榎本先生ご夫妻から離れて私は生きて行けるかしらということをお思いました。その様に神様の御愛というものを、聖書を通して榎本先生ご夫妻を通して、この身に全く確実に植込んで頂きました。

ですから私はここへ参りまして、先生に対する、勿論神様に対する、愛がここに満ちていると思うんですね。丸山さんもどんなに先生を通しての神様の愛に感じて居られたか、その愛にお答えしたいというそのお心が全部ここに表われていると思っております。

牧師館を拝見させて頂き、昨晚一晚休ませて頂き色々話させて頂きましたけど、本当に一つ一つが神様の愛に感じてその愛にお答えしたものがここに表われていると、そういう風に思わせて頂いております。全く素晴らしい事でございます。

愛のみが滅びず、そしてそののみが私共の生きて行く原動力でございますし、又神様がどんなに報いて下さる方かということですね。先生の所に駆け込んで来た悩み多き者、今にも死にそうなも

の、そういつた者を先生ご夫妻が全部抱え込んで下さつて、そして神様の愛をもつてもてなして下さつて、如何に立上らせて下さつたか……。その先生ご夫妻の、勿論神様に動かされてのお働きですけれども、それに主はどんなにお報い下さるかということですね、それを見させて頂きました。

詩篇二七篇の……ここを榎本先生がよくおつしやつたことです「私は信じます、生ける者の地で私は主の恵みを見ることを」私共は勿論主の御愛の中に永遠に主のお顔を拝して、御愛の中に懐かれることとございますけど、この地上、生ける者の地で神様の恵みを見る事ができるんですよ……とお話し頂きました。その通りにここに、先生ご夫妻の我を忘れての、神様の愛に押し出されてのお業に対するお報いが、ここにこうして表われたことと思います。その歩みはここからまた益々増し加わることも減ることなく前進することと思ひます。

私は今、堺の浜寺聖書教会という所に行かせて頂いております、そこでは又そこでの私共の歩み

方があると思ひますけど、本当に皆さんはこの榎本先生ご夫妻に導かれていらつしやる仕合わせというものを、よくよくお覚えにならなければいけないと思ひます。

私が自分でどういふ風に言つたらよいか分からない様を思ひで先生の前にじつとしておりますと、先生は御自分から「こうですか、ああですか」とその悩み苦しみを引張り出す様にして下さいました。もうただ上りこんで先生のお部屋でそういうようにして頂きました。その古いお部屋が無くなつてしまつて、とても私共にとりましては辛い思ひでございます。本当にお世話になりましたあの牧師館の一部屋！色々な事を思うだけでも胸が一杯になるものでございますから、そういうものは無くなつた方がよいのかも知れませんが……。それほど私共一人一人が榎本先生ご夫妻の、主の愛に動かされてのその愛に包まれて居りました。

皆様、これからもここで生活なさりと成長なされますね、本当に私は羨ましいと思ひます。色々辛い事があります時に、駆け込んで来て礼拝の

席にじつと坐つて、そしてお恵みに包まれないなあと思つたことが度々ございました。皆様は毎週そのお恵みに包まれるんですね、素晴らしいと思います、よくよく感謝してですね、ここで礼拝をましますお守りになることをおすすめていただきます。そして間の聖書研究でもですね、先生ご夫妻にこうして導かれるということが滅多にない仕合わせと思つてです。感謝して感謝してこの会堂で皆さんは礼拝をお守りになれるんですね、素晴らしいと思います、一つ一つに皆様の愛と祈りが表わされているこの会堂で……。

どうぞ益々お励みになつて、主の本当に練達された民となつて、多くの魂の為に働きになる様にお祈りさせていただきます。私共の為にどうぞ覚えて祈つて下さいます様お願いいたします。

今日は本当に有難うございました。

宇野恵子（東京都）

皆様しばらくでございました。

この牧師館と会堂が新しくされているというこ

とを前々から伺つておりましたし、昨年はこちらに帰つて参りまして見せて頂きましたが、その時は牧師館の土台を工事しているところでございます、今まであつた所が消えて無くなるのが淋しい様な気が致しました。

私も昭和三三年に前田教会に來させて頂きました、真の信仰、真の礼拝、みことばによる信仰ということを本当に教えて頂きました、この様な素晴らしい教会があつたのか……それまであちこち教会を廻つておりましたけれども、いつも満足が与えられませんでした、何とかして自分の納得の行く信仰の持てる教会は無いものかと、あちこちら求めておりましたけど、ここに不思議な様に導かれました、榎本先生の暖かい御指導を頂きました。前田教会には四年間居た訳ですけど、弱い信仰ながら昭和三八年に結婚いたしました、東京、山形又東京に戻りまして、それから仙台再び東京とあちこち廻りましたけれども、本当にここに居らせて頂きました四年間が、私のその後の主にある生活の基の力とさせて頂いたことを本当に感謝い

たして居ります。

今、東京渋谷の藤村勇先生の所で礼拝を守らせて頂いておりますけれども、何処にありましても主が伴なり給う所、主が導き給うた所で、みことばによつて歩むことができるというのを、前田教会に居る時に教えられまして、何処にありましてもみことばによる信仰が最も幸であるということをお教えられております。

この落成式に当りまして、私の母教会である前田教会のこの式に出席させて頂きたいと願いつつも、遠くに居りますしそれに色々家庭の事情がございまして、出席できるだろうかできないだろうか色々祈つておりましたところ、不思議な様に神様のみことはを与えられました、皆様と共に喜び感謝するこの様な幸いな席に与らせて頂いたことを本当に感謝いたしております。

渋谷教会には前田教会出身の小森谷先生ご夫妻や大塚公園教会の内田喜代さんなどがいらつしやいまして親しくさせて頂いております。それで、皆様行きたいとおつしやつておりましたけれども

様々の事情で来られませんが私が代表の様な形で参りました、この喜びと感謝それから上よりの賜物を沢山頂戴し、これを携えて又東京での生活を歩かせて頂きたい、又その御報告をさせて頂きたいと願つております。

本当に有難うございました。

福岡大塚公園教会 花田 勇氏

八幡の皆さん、会衆の皆さん、神様がこういう結構な会堂と牧師館を与えて頂きましたことを心からお祝い申し上げます。

榎本先生と私が主の前で知り合つたのは四〇年前……四〇年はならないが四〇年そこそこになると思います。榎本先生の恩師である折滝先生の所で、榎本先生は献身なさり、私も信者としてそこで励んでおつた様を訳でございます。

私は四三年ほど前、折滝先生から個人伝道を受けましたがございます。その時の内容は私は知りませんが、私は「先生、私は結構でございます。皆様が極楽々々というて行かれますから地獄は空

いておりましたよう、私は一人でゆつくり地獄へ行きましますからもう余計なことを言わないで下さい」と会堂で折滝先生に堂々と申し上げて、如何にも天下を取つた様を気分で、あゝもう余計なことだと私は退散しました。

しかしそれから間もなく、五尺の体の置き場所が無い様になり、とうとう私も神様の前にひれ伏さなけりやならない様に追い込まれて教会に主の前に励みました。榎本先生もその時おいでになつておられた訳です。

榎本先生はその当時、青竹に袴をはかせた様を全くそんな形……本当に化学者ですからその様な形の方でございました。今の様な^にこ^にこ^になんということは全然ございません。全く自分のことは分からないんで先生のことにはよく分かる様なことでした。

私もあとから聞いたんですが「勇さん、あなたのために祈られました、祈ることを命ぜられました」ということでした。私の姉夫婦が先に救われておりました、それで私を教会に連れて行つて個

人伝道をといた様を順序になつた訳でございます、姉夫婦からとにかく勇が神様に従う様にお祈りして下さいと……私は頼んでいないですよ、私は逃げて行つたんですよ……一生懸命祈つた、だから神様が私を追い込んで下さつた、五尺の体の置場が無い様になり、とうとう神様の前に行かないやならない様に、神様が私になして下さつたのです。

四年か五年ほど前、まだ旧会堂の頃、私は新年聖会にずつとお世話になつておりました。その時「会堂建築献金」という箱がかかつている、「あ、八幡は会堂を建築なさる」とそれを見て分かつた様な訳でございます。

「……建築をなさる……これではやはり狭いもんな……」という感じをし、どういう形に神様がなさるのだろうかということ、私も陰乍ら神様の御手を動かすお祈りを切に献げました。「金もわが物、銀もわが物、宇宙とその中に満つるものは皆エホバのものなり」とおつしやつて下さる方がどういふ摂理をもつてどういふ形をもつて私共

を楽しませて下さるか、よそ事ながら私共一生懸命一緒に祈りし、カナンの地に入れるとおつしやつて下さつた神様だから、必ず一つ一つ楽しんでませて下さると信仰をもつて祈らせて頂きました。

よその教会から「会堂を建築いたしますから寄附して下さい」などと色々郵便物が来る様なことを私もよく見ておりますが、榎本先生はどういう形をしておいで下さるだろうか……私は榎本先生が又皆様がこの際神様の豊かな方であることを本当に目で見えて体験なさる様に、神様の栄光が会堂によつて表われる様に、切に祈らせて頂きました。

二年ほど前でしたか（今の牧師館の）土地が手に入りましたとき、私は何かの用件でお伺いしました。榎本先生と奥様が「これでございます」と案内して下さい、「あゝこれでございますか」と見ると、こうなつた（傾いた様な）平屋が建つて居りました。私はその時、「先生、無理をなさらない様に、神様は必ず与えて下さると思ひます、信じております」と言つてお別れしたと思つてお

る訳でございます。そのことを神様は実現して下さいました。

私がかつて皆さんの祈りによつて、神様の前にひれ伏さねばならぬ様に追い込まれた、逃げていた私を捕えて下さつた、これはただ祈りによりました。

同様にこの教会も祈りです。ただ祈るより他に道が無い、祈れば必ず神様は答えて下さる、「滞りはしない、遅くあらば待つべし」とおつしやつて下さつた。そのことをここにはつきりと実現して下さいたことを本当に心からお祝い申し上げます。

そしてこの会堂において、皆さんが日曜日は欠かさず礼拝においてになり集會に励み……励みたる者は天国を取るとあります。ダビデ王が官を築いて励んで神様を称えたとき、神様はダビデ王に対して本当に恵みなさつた。その様に、今度は会堂が出来たんだから、皆様がここで精一杯、集會におくれない様に……私はいつも家族のものにやかましく言うんです、「一週間に一回、この

次の日曜日にもう分かつてゐる、それなのに時間に遅れる……何の為に遅れるか」と。尻をひつからげて神様の前に礼拝なさること、集会に励みなさること……同じ励むならそうなさつたら、神様は必ずカナンの地に入れるとおつしやる。

こんな結構な神の宮が築かれたんでございますから、どうぞ今度は皆さん達お一人一人がこうなさることが、榎本先生が恵みを受けなさつた様に皆さんお一人一人が恵みを受けなさる才一歩だと私は思います。

私も祈りに答えられて、今日皆さんと共にこうして顔を見合ふことができ、又結構な会堂の落成式の端に加えて頂きましたことを心からお礼申し上げます、栄光主にあれと栄を主に帰し、落成記念の証しを終わらせて頂きます。

○ 讚美歌五一三 一同

○ 祈禱 榎本牧師

天のお父様、あなかがはかり知ることのできな

いお恵みの中に感謝の一時を持たせて頂きました感謝いたします。

「恵みに感じ慎しみ敬い神の旨に叶うところをもつて之に仕うべし」とおおせ給いました、弱い者があなた御自身の御旨に何とかして……と願つております、どうかみたまが助けてあなたの前に歩み行かしめて下さることをお願いいたします。今、尽きない感謝を尊い御名によつてみ前に獻げまつります。アーメン。

○ 挨拶 榎本牧師

長い時間この席にお坐り頂いて、共に感謝する時を与えて頂きました、誠に有難うございました。先程から皆さんの祝辞や感想の中で承りまして、本当に神様の恵みといつくしみによつて、今日こういう会堂を神様が与えて下さつて、更に今後ここでどういふ恵みを満たして下さるかを楽しみに、今日ここから踏み出して行きたいと思ひます。

私共が今日ここにある陰に、多くの聖徒方が陰にあつて神様の前に祈つて下さつたことを思いま

す。先に天国に行かれた折滝先生、又河本さん・
・：ことういう聖徒方、また福岡の末永の叔母など
隠れた聖徒達が、この尊い福音の為に何とか用い
て頂けるならと、この私の為に陰にあつて祈つて
下さつた、それにより今日のことういう恵みに与か
ることができたとしみじみ感謝しております。

一人の人の御用の陰にどんなに多くの人の祈り
が必要であるかということを痛切に感じておりま
す。私自身もこうして御用させて頂く陰に、皆さ
んの篤い祈りがなかつたら御用ができなと思います
ます。どうか皆さん覚えてこの小さい者の御用の
為にお祈りを続けて頂きたいと思ひます。

神様が今日までこの様に慰んで下さつたことを
心に留めて、それぞれ神様が遣わして下さつた持
場立場事情境遇の中で、雄々しく主に従つて進ん
で行きたいと思ひます。

長い時間どうも有難うございました。

また御遠方、東西南北各方面からこうして集め
て頂きましたが、やがて主の御前に私共もつとも
つと多くの兄弟姉妹と共に、主を崇める時が来る

事を覚え、今日はその一つのリハーサルの様な感
じがして感謝に堪えません。
本当に有難うございました。

以上

聞き洩らした部分など不具合の
点は御容赦下さい

編集室